国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語の機能動詞表現をめぐって

著者	村木 新次郎
雑誌名	研究報告集
巻	2
ページ	17-75
発行年	1980-03
シリーズ	国立国語研究所報告 ; 65
URL	http://doi.org/10.15084/00001069

日本語の機能動詞表現をめぐって

村　木　新次郎

1.　機能動詞とは何か
2.　機能動詞のあらわれかた
2.1.　形式的タイプ
2.2.　動詞の連語への展開
2.3.　名詞の述語形式化
2.4.　構成要素の性質
2.4.1.　名詞――動作名詞
2.4.2.　動詞――機能動詞
2.4.2.1.　機能動詞と実質動詞の対立
2.4.2.2.　連続体
2.5.　機能動詞結合と自由連語・固定連語
3.　機能動詞結合の諸特徴
3.1.　結合のつよさ
3.2.　名詞表現
3.3.　<…スル>との交替
3.4.　格支配
3.5.　文法的意味
3.5.1.　ヴォイス的な意味
3.5.1.1.　受動表現
3.5.1.2.　他動=使役表現
3.5.1.3.　使役の受動表現
3.5.1.4.　相互態
3.5.1.5.　基本態と対応する機能動詞結合
3.5.2.　アスペクト的な意味
3.5.2.1.　始動相
3.5.2.2.　終結相
3.5.2.3.　実現相
3.5.2.4.　継続相
3.5.2.5.　反復相
3.5.2.6.　強意相・緩和相
3.5.3.　ムード的な意味
3.6.　文体的特徴
3.7.　機能動詞と表記
4.　まとめにかえて

1.　機能動詞とは何か

機能動詞という用語は，日本語の研究でまだ一般的に用いられていない術語なので，はじめに機能動詞とは何か，を問い，その定義づけをこころみる。(注1)

においが　する	感じが　する	さそいを　かける
決定を　くだす	連絡を　とる	さそいを　うける
注目を　あつめる	襲撃に　あう	沈黙を　まもる

などの，ふたつの単語（いわゆる助詞は単語よりも小さな単位とみておく）からなる連語(注2)（あるいは語結合）は，その知的意味（あるいは名づけ的な意

味，対象的意味）をかえずに，

におう	感じる	さそう
決定する	連絡する	さそわれる(注3)
注目される	襲撃される	沈黙しつづける

などの単語と交替しうる。そして，はじめにあげた連語とこれらの単語を対比してみると，連語はいずれも名詞と動詞がくみあわさった構造をもっていて，連語の名詞部分が，実質的意味（あるいは素材的意味，語彙的意味）をにない，動詞部分は，本来の実質的意味をまったくもたないか，もしくはほとんど失っていて，もっぱら形態論的かつ統語論的な役割をはたしていることがうかがいしれる。このような，**実質的意味を名詞にあずけて，みずからは文法的な機能をはたしている動詞**を**機能動詞**と名づけ，**機能動詞をふくむ，ひとまとまりの連語**を**機能動詞結合**あるいは**機能動詞表現**とよぶことにする。機能動詞結合は形態面を，機能動詞表現は意味内容面をそれぞれ重視したよびかたで，ひとつのもののふたつの側面にすぎない。機能動詞は，意味論上の任務の負担から，大なり小なり解放されて，単語よりも大きな統語論上の単位である連語や文を構成するための形式的な役目をしていると考えられる。連語のなかで動詞のためにひらかれた場所に，実質的意味を欠いた動詞がおさまると，機能動詞結合ができ，機能動詞表現がうまれる。なお，あとで検討するが，機能動詞結合がひとつの動詞といつも交替するわけではない。それは，機能動詞結合のもつ特徴のひとつにすぎない。また動詞と交替しうるといっても，意味の総和がひとしいというわけではない。知的意味の範囲内で交替できるということである。

この小稿は，うえに定義された機能動詞と機能動詞結合のあらわれかたとさまざまな特徴について，現代日本語を対象に，共時論的な観点から考察したものの中間報告である。

2.　機能動詞のあらわれかた

2.1.　機能動詞結合の形式的タイプ

（名詞）＋（動詞）という構造の連語では，限定をうける動詞が連語の核になり，連語の定義からもあきらかなように（注２参照）動詞は不定詞とでもいうべきすがたであるけれども，動詞を限定する名詞にはいくつかの文法的なタイプがある。すなわち，名詞に格をしめす形式（付属辞）のついたガ格やヲ格やニ格がそれである。もっとも典型的な機能動詞〈する〉について，形式的タイプをあげていくことにする。引用にあたっては，一部表記を改めたものがある。㋢はシナリオの略。

a）ガ格の名詞＋機能動詞

(1) だれかが唾液を呑む音がした。＜遠藤周作「白い人」
稲光が／においが／響きが／声が／味が／感じが／……する

b）ヲ格の名詞＋機能動詞

(2) 例えば指導者を見分けるのに勘もよい働きをすることはあるが，＜武谷三男「革命期における思惟の基準」
まねを／つりを／料理を／準備を／サーヴィスを／ドライヴを／咳を／けがを／……する

c）ニ格の名詞＋機能動詞

(3) 彼はもう一度，コンクリート床の上の本のかたまりを足蹴にした。＜吉行淳之介「鳥獣虫魚」
人任せに／折半に／からに／横に／黄色に／あてに／……する

d）ニ／ト格の名詞＋機能動詞

(4) 総資金利ザヤ0.43%も，むしろ社長が誇りにしていい数字だ。＜サンデー毎日　1978. 8. 13

(5) ルビーは，そう追及する前提として買取ったものであった。＜大仏次郎「帰郷」
おわりに/と／根拠に/と／目的に/と／問題に/と／……する

e）なまえ格の名詞＋機能動詞

(6) 元さんは父・作次郎が死んで数年して，村を出て，各地を転々としている。＜毎日（新聞）（19)78. 8.23　夕（刊）〔以下，かっこ内は省略する〕

(7) 啼き声の優れた鶯は一羽一万円もする。＜谷崎潤一郎「春琴抄」

最後のなまえ格の例は用法が非常にかぎられている（他に，「公園まで約100メートル ある」など）点，また，他の語句が名詞と動詞の間にはいらな

い点で，例外的といえよう。とくに(6)の，時をさししめす名詞とのむすびつきは，＜数年する／した＞のような形で終止することもなく，かつ連体の用法もない。もっぱら，〈……すると〉〈……すれば〉〈……して〉などの連用あるいは文につづく形式で用いられるという形態論的かつ統語論的な拘束がつよい。

以上がこの稿で対象としている名詞と動詞のくみあわさった機能動詞結合の形式的タイプである。さて，機能動詞結合を構成しているふたつの要素の検討にはいる前に，これらの機能動詞結合をとりまいている領域を一瞥しておきたいと思う。

第一番目に，名詞部分が義務的に，限定することばを必要とする場合の連語があること，すなわち，機能動詞結合が syntagmatic なひろがりを必要としている連語の問題を考えてみる。〈思いが　する〉〈色を　する〉〈形をする〉という連語は，名詞が連体修飾をうけないすがたではとりだしにくい。なんらかの連体修飾をうけて，はじめてまとまった連語になるからである。

(8)　準次は，何か奇異な思いがしていた。＜椎名麟三「神の道化師」

(9)　その白墨の色が，もう何日か経ったような，しめった色をしていた。＜石川達三「人間の壁」

〈……顔を　する〉〈……ふりを　する〉〈……態度を　とる〉〈……姿勢をとる〉のような連語も同様に syntagmatic なひろがりを義務的に必要とするもので，(名詞)＋(動詞) という最小の連語としてはとりだしにくい。ここでも，〈赤い屋根を　した……〉〈丸い形を　した……〉のような語の連なりは終止の形をもたないという形態・統語論上の制約がある。

第二番目に，名詞を他の品詞ととりかえた場合の機能動詞結合について考えてみる。こちらは，paradigmatic なひろがりといえるであろう。たとえば〈(会議が) うまく　いく〉の動詞〈いく〉の実質的意味を抽象することは，〈納得が　いく〉の〈いく〉と同様，それほど容易ではない。また，〈まるくする〉〈(顔を) あかく　する〉の動詞〈する〉は，他動性という文法的意味

をもってはいるが語彙的意味はもたない。これらの連語の背後には〈まるめる〉〈あからめる〉という派生動詞がある。このような(形容詞)＋(動詞)という構造の機能動詞結合もある。また，〈(交渉が) 順調に　はこぶ〉〈不安におちいる〉〈困難に　いたる〉などの（形容動詞)＋(動詞）というタイプの機能動詞結合もある。さらに，〈しばらく　する〉〈やや　ある（「ややあって……」という時間的表現)〉(いずれも 終止の形は 存在しない）〈閑散とする〉は，あいだに他の語句がはいりにくいことから，あるいは一語（複合語）とみるべきかもしれないが，うえに述べてきた機能動詞結合の延長上に位置をしめるものと思われる。さきにあげた「数年して……」と隣りあわせである。(副詞)＋(動詞）のタイプである。

次に，名詞を動詞とおきかえるとどうなるであろうか。この場合にもいくつかの形式がありうる。そのひとつは，〈読んだり書いたり　する〉〈行ったり来たり　する〉のような並立の表現の場合で，この場合の動詞〈する〉は語彙的意味を完全に失っているといってよい。この表現は，〈読み書きをする〉〈行き来を　する〉という（名詞)＋(動詞）と平行関係にあるが，意味が異なることもある。もうひとつの形式は，名づけ的な連語の範囲をこえた，とりたてや限定などのモーダルな意味をそえる形式があらわれる場合である。

(10)　俊樹は，驚いたように手を放したが，怒りもしないで，笑った。<大仏次郎「帰郷」

(11)　望みというものは，意固地になって詰め寄りさえしなければ，<岡本かの子「河明り」

〈怒りも　する〉〈詰め寄りさえ　する〉は連語ではない。これらの〈する〉も機能動詞であろうが，連語の枠組の外にある。動詞によってあらわされている意味内容にモーダルな意味を特徴づけるときに用いられる，分析的な表現形式である。このような，連語の枠をこえた形式に参加できる機能動詞は，〈する〉〈いたす〉〈なさる〉〈できる〉などごく少数のものにかぎられているようである。

2.2. 動詞の連語への展開

はじめに機能動詞結合が交替形をもつことにふれた。それらのうち，機能動詞結合の名詞部分が，ある動詞と派生関係にあるときには，次のような関係がなりたつ。

におう	——	においが　する／ある
ひびく	——	ひびきが　ある／する
さそう	——	さそいを　かける
うたがう	——	うたがいを　いれる／はさむ／もつ
さけぶ	——	さけびを　あげる
おわる	——	おわりを　つける　　おわりと／に　する
かかわる	——	かかわりを　もつ／しめす／みせる
⋮		⋮

これらの対応は，形のうえで，左の動詞がそれぞれ（名詞）＋（動詞）に分化していると考えることができる。その際，定義のところで述べたように，〈におう〉〈さそう〉などの動詞の実質的意味は〈におい〉〈さそい〉などの名詞に移行して，〈する〉〈かける〉などの動詞は文法的機能をはたしている。ひとつの動詞が動詞をふくむふたつの連語に展開したものとみることができ，連語は現象上，動詞をひきのばした形をしている。サ変動詞とそれに対応する機能動詞結合の場合も，ひきのばし形のヴァリントとみられよう。

期待する	——	期待を　かける／もつ
成功する	——	成功を　おさめる
注意する	——	注意を　はらう
優勝する	——	優勝を　はたす／とげる
計画する	——	計画を　たてる
工夫する	——	工夫を　こらす
メモする	——	メモを　とる
⋮		⋮

誤解をまねくおそれがあるのでことわっておきたいが，うえに「派生関係にある」という表現を用いたけれども，ここでは，歴史的な派生変化を意味するものではない。共時論的にこのような関係がなりたつということだけを問題としていて，どちらがもとの形で，どちらがその派生であるかをここでは問わない。転成という用語をさけたのもその意味からである。

機能動詞結合を構成する名詞が，動詞成分をふくむ複合名詞であることもおおい。〈歯を　みがく〉〈レースを　あむ〉〈はやく　おきる〉などの連語が複合名詞となり，〈歯みがきを　する〉〈レースあみを　する〉〈はやおきをする〉のようなむすびつきをすると，これも，ひとつの機能動詞表現とよぶべきであろう。

2.3.　名詞の述語形式化

動詞のひきのばし形とは反対に，名詞の側からみると，名詞を述語形式化したものが機能動詞結合であるといえよう。ただし，すべての名詞に述語形式化がおこるわけではない。多くは，ひろい意味での動作名詞であり，ときに非動作名詞についても述語形式化がおこる。（述語形式化については，3.1. 参照）一種の，名詞の動詞化ともいえる。名詞を動詞化するには，〈メモる〉〈デモる〉〈愛す(る)〉〈訳す(る)〉〈大人ぶる〉〈涙する〉〈結論する〉のように，非分析的に派生語あるいは複合語となって合体したすがたをとることもある。ここで，-ru，-su は動詞化するための接尾辞，-buru と -suru は接尾辞とも複合語のあと要素とも考えられる。非分析的といっても，あとでみる分析的な連語との関係からみた相対的な性質である。日本語の動詞は，Ru/Ta (Ru は ru と u が，Ta は ta と da がそれぞれ異形態であることをしめす）というテンスのカテゴリーにささえられたパラダイムをもつことを絶対の条件としている。このようなきびしい動詞の形態論的な拘束は，一般に他の品詞からの動詞への転成を困難にしているはずである。現代日本語の場合，名詞からの動詞化は生産力のたかい -suru にもっぱらたよっている。他に，-ka-suru（国有化する，近代化する，抽象化する，など），-zukeru

（基礎づける，義務づける，位置づける，など）などが，抽象名詞を動詞にかえるが，-suru の生産力には及ばない。

これらの非分析的統合的な名詞の動詞化に対して，機能動詞結合は，分析的な名詞の動詞＝述語形式化といえるであろう。〈満足〉〈想像〉〈連絡〉〈判断〉〈電話〉などの動作名詞は，-suru がついて合成動詞にもなるが，機能動詞とくみあわさって，〈満足が　いく〉〈想像が　つく〉〈連結を　とる〉〈判断を　くだす〉〈電話を　かける〉などの機能動詞結合にもなる。連語という形態をとる点で分析的であり，文を構成する要素として，これらの連語が全体で述語になるという点において，ひとまとまりの述語形式とよぶことができる。〈音〉〈打撃〉〈調子〉などの名詞は，〈音する〉〈打撃する〉〈調子する〉という形をもたず，〈音が　する〉〈音を　たてる〉〈打撃を　あたえる〉〈打撃を　うける〉〈調子を　とる〉などのように機能動詞の力をかりて，ひろい意味での動詞化がおこる。〈くしゃみを　する〉〈咳を　する〉〈汗を　かく〉などの連語も同じ仲間であろう。

名詞を述語形式化するのに，-suru を中心とした非分析的な手つづきと，機能動詞〈する〉〈とる〉〈かける〉などのたすけによる分析的な手つづきとが競合しているわけである。

2.4.　構成要素の性質

機能動詞結合を構成するふたつの要素である名詞と動詞の性質を検討する。

2.4.1　名詞——動作名詞

機能動詞とむすびつく名詞は，典型的には動作名詞であるが，状態や現象をさししめす名詞のこともある。

動作名詞の典型として，〈さそいを　かける〉の〈さそい〉や〈ぬすみを　はたらく〉の〈ぬすみ〉などの動詞と派生関係にあるものと，〈決定を　くだす〉の〈決定〉や〈影響を　あたえる〉の〈影響〉のような，いわゆるサ変動詞語幹をあげることができる。これらの名詞は，動詞との間に形態上の共

通性がみとめられる。これらはスル型の機能動詞表現をつくることが多い。

状態名詞はナル型の機能動詞表現をつくることがある。〈最高潮に　達する〉〈不振に　おちいる〉〈危険を　及ぼす〉などがそうである。

現象をさししめす名詞も，さまざまな機能動詞表現をつくりだす。〈氷がはる ≒ こおる〉〈けむりが　たつ ≒ けむる〉〈稲光が　する〉〈夕だちがある〉などの自然現象，〈まだたきを　する ≒ まばたく〉〈息を　する〉〈汗を　かく ≒ 汗する〉などの生理現象，その延長上にあると考えられる，〈けがを　する〉〈やけどを　する〉などのひろい意味での病理現象など。

見かけ上は動作名詞の範疇にはいらないと思われる名詞が，連語のなかで，より慎重にいうならアクチュアルな文のなかで，臨時的に動作名詞のように機能する場合がある。たとえば，

(12)　あす，客が　あります。

(13)　そろそろ　お茶に　しましょう。

のような例では，(具体名詞)＋(動詞) という様相をしめすけれども，〈客〉は〈来客〉の意味，すなわち〈客がくること〉，〈お茶〉は〈茶をのむこと〉を意味しているとも考えられる。〈迷い子が　ある〉〈トランプを　する〉などの連語も，上の例にちかい表現であろう。これらの連語で，〈客〉や〈迷い子〉がヒトとして機能しているというより，また〈お茶〉や〈トランプ〉がモノとして機能しているというより，いずれの場合もコトの意味で用いられているのではなかろうか。これは，〈客を　もてなす〉〈迷い子を　さがす〉〈お茶を　こぼす〉〈トランプを　かう〉などの連語において，それぞれの名詞が具体名詞として機能していることを考えあわせると，さきにあげた動作名詞化した用法のずれがより一層はっきりとうかびあがってくるであろう。

ある名詞が動作名詞であるかどうかは，このように連語に依存しているといってよいが，次のような例もあることから，連語も結局は文に依存する。

(14)　あなたのうちに電話がありますか。

(15)　あなたにさきほど電話がありました。

どちらも〈電話が　ある〉という連語がとりだせるのであるが，(14) の

〈電話〉は具体名詞で，(15) の〈電話〉は動作名詞と解釈される。

2.4.2　動詞——機能動詞

機能動詞結合を構成する動詞は，いうまでもなく機能動詞である。一般に機能動詞は，実質的意味のありなしによって，実質動詞と対立する。機能動詞であるか実質動詞であるかは，その用法によってきまるものであって，動詞に固有のものではない。一方，実質的意味の空疎化にはいろいろな段階があり，機能動詞としての性格も典型的なものから中間的なものまであり，いわば連続している。以下にそのことをしめす。

2.4.2.1　機能動詞と実質動詞の対立

はじめに，同一の動詞が実質動詞として用いられている連語と，機能動詞として用いられている連語を対比してあげてみよう。

実質動詞としての用法	機能動詞としての用法
家が　ある	連絡が　ある　　夕立が　ある
(こんろに)やかんを　かける	(太郎に)さそいを　かける
木の実を　とる	連絡を　とる　　指揮を　とる
代金を　はらう	努力を　はらう　　考慮を　はらう
品物を　おくる	拍手を　おくる　　合図を　おくる
たきぎを　あつめる	注目を　あつめる　　期待を　あつめる
めしを　くう	併殺を　くう　　しめだしを　くう
皿を　かさねる	練習を　かさねる　　失敗を　かさねる
⋮	⋮

左にあげた連語の動詞は，いずれも具体的な実質的意味をもっているけれども，右の連語の動詞は，多かれ少なかれ実質的意味を失っていて，くみあわさる相手の（動作あるいは現象）名詞によりかかっている。実質動詞としてあげたものは，相手の名詞をとりさっても，動詞の意味を保持できるのに対して，機能動詞のほうは，名詞からきりはなされた場合には，動詞の意味がもはや保持しにくいように思われる。機能動詞であるかどうかは連語のなかできまるものであるから，これこれの動詞が機能動詞であると列挙するこ

とはできない。

実質動詞と機能動詞のこのような関係は，一般に基本と派生の関係としてとらえられる。すなわち，実質的な用法から機能動詞としての用法が派生したとみるのが妥当であろう。具体的な意味が抽象的形式的な意味にずれていくのは言語のふつうのすがたであるとみられるからである。

2.4.2.2　連続体

実質動詞と機能動詞のちがいといっても，それは絶対的なものとはいえない。実質的な意味の空疎化には，いろいろな段階がありうる。たとえば，〈たきぎを　あつめる〉〈切手を　あつめる〉といった〈あつめる〉の基本的用法と，機能動詞結合としての〈注目を　あつめる〉〈期待を　あつめる〉などの表現との間に，〈視線を　あつめる〉〈人気を　あつめる〉などが位置するものと思われる。というよりもむしろ，機能動詞結合は，〈視線〉とか〈人気〉といった直接動作とつながらない抽象名詞とむすびつくことを経由して，〈注目〉〈期待〉〈信頼〉〈尊敬〉〈羨望〉などの動作性名詞と結合しているのだとみるべきであろう。〈かける〉の場合でも，〈(肩に) 手を　かける〉という基本的な用法から〈(太郎に) 声を　かける〉が派生し，その延長上に〈さそいを　かける〉や〈相談を　かける〉〈号令を　かける〉などの機能動詞表現があるのだと思われる。つまり，具体名詞から抽象名詞へ，抽象名詞から現象名詞や動作名詞へと連続していて，同一の動詞であっても，むすびつく名詞の種類によって，実質的であったり，機能的であったり，またその中間の性格であったりする。実質動詞と機能動詞のちがいは，質的な差ではなくて，相対的な量的な差といえるであろう。

ただ，〈においが　する〉〈落雷が　する〉〈稲光が　する〉などの〈する〉は，実質的意味が全くなく，他の機能動詞との間に質的なちがいを感じさせる。これらの〈する〉は具体的な用法からの転用という感じをおこさせない。

以上は同一の動詞についての実質的意味の空疎化をとりあげたのであるが，同一の事象を表現するいくつかの可能性があるときにも，動詞の実質的

意味の濃淡が問題となりうる。

たとえば標準語で〈うそを　いう／つく〉という連語がある。ひろい意味での文体的な差を無視すれば，同じことがらをさししめていると考えられる。〈いう〉は〈うそを／真実を／冗談を／文句を／お世辞を／……いう〉のような連語を，〈つく〉は〈うそを／悪態を／へどを／ためいきを／……つく〉などの連語を，それぞれパラレルな表現としてもっている。ところで，〈いう〉の実質的意味は〈うそ〉からきりはなされてもあきらかであるが，〈つく〉の「ある（望ましくない）状態を呈するという意味は，〈うそ〉に依存していて，〈うそ〉をきりはなしてはとりだしにくい。(注4) これは，〈～を　つく〉という表現が現代語ではあまり生産的でないこととも関係しているであろう。同じことがらをのべる〈うそを　いう／つく〉というふたつの連語で，〈つく〉は〈いう〉よりも機能動詞としての性格がつよいのである。

〈うそを　つく〉の〈つく〉と似た動詞に，〈汗を／いびきを／恥を／あぐらを／……　かく〉の〈かく〉がある。(注5) このような連語も現代では生産的とはいえず，〈ある望ましくない状態を呈する〉という〈かく〉の意味は抽象しにくく，名詞によりかかっている。〈汗を　ながす〉は必ずしも〈汗を　かく〉と同一の意味とはいえないが，〈かく〉と比較すると，〈ながす〉の実質的意味は〈汗〉に依存することなく，あきらかである。

2.5　機能動詞結合と自由連語・固定連語

機能動詞結合と，動詞を核とする他の連語とのちがいにふれる。

実質的意味がいきている実質動詞の場合には，（名詞）＋（動詞）という連語のなかで，連語の構成要素のそれぞれが語彙的意味をもった自立的な単語であるのに対して，機能動詞結合の場合には，機能動詞の自立性が希薄で相手の名詞に依存する傾向がつよく，連語全体で一語化した合成動詞にちかい。ちなみに，むすびつきが固定してしまったものを慣用句とみることができる。すなわち，連語は，むすびつきの自由なものから固定したものへと，自由連語（ふつうの連語），機能動詞結合，固定連語（慣用句）とならぶ。

〈馬が　いななく〉〈かたを　すくめる〉などの連語は，〈いななく〉のガ格の名詞，〈すくめる〉のヲ格の名詞に対する語彙的制限がつよく，現象上は固定連語と類似するけれども，連語の意味を個々の単語が分担しあっている点で，〈ほぞを　かむ〉〈腹が　たつ〉〈べそを　かく〉などの固定連語と性質を異にしている。固定連語にもさまざまなタイプがあるけれども（高木1974），一般に，全体の意味を各要素からとりだしにくく，全体で一単語に相当することが多い。自由連語と固定連語のちがいは，物理的な混合と化学的な化合のちがいにたとらえられることがある（Schmidt, W. 1965）。

うえにみたように，自由連語の語彙的制限，いいかえれば，連語という syntagmatic な構造にしばられた paradigmatic な語彙選択の自由度は，大きなものから小さなものまであり，この自由度の小さなものとの動詞のむすびつきは，慣用句と同じではない。

自由連語と機能動詞結合とのちがいは，ほぼ実質動詞と機能動詞のちがいに還元できる。すでに指摘したように，一般に実質動詞と機能動詞は，実質的意味をパラメーターとする連続体であった。自由連語と機能動詞結合との間に，それゆえ一線を画することはできない。そこにはどちらかの典型的なものもあれば，中間的なものもあり，さまざまな段階がありうる。両者の関係に，構成要素である名詞はあまり関与しない。機能動詞とむすびつくのは，ひろい意味での動作名詞であったが，動作名詞は機能動詞結合の必要条件であっても，十分条件とはいえない。すなわち，〈演奏を　きく〉〈さそいを　ことわる〉〈（自動車の）運転を　ならう〉などの連語は動作名詞をふくんではいるが，自由連語とみられるからである。

自由連語と機能動詞結合の中間形態と思われる，〈雨が　ふる〉という連語をとりあげてみよう。〈雨〉は，雪や霧や虹と同様，モノをあらわすというより自然の現象をさししめす名詞であろう。現象という点では，光や音やにおいにも通じる。〈ふる〉は，ガ格に雨や雪やみぞれやあられなどを予想する動詞で，〈（なにかが）空からおちてくる〉という実質的意味がとりだせそうである。〈ふる〉が実質的意味をもつならば，〈雨が　ふる〉は自由連語

とみるべきであろう。しかし，〈霜が　ふる〉(〈霜が　おりる〉と競合関係にある）という連語があること，さらに，〈霧が　たつ〉〈虹が　たつ〉〈光がある〉〈音が　する〉〈においが　する〉などのいずれもある現象があらわれたり，あらわれていることを表現する連語で，動詞の実質的意味は希薄であり抽象しにくいこと，以上の二点を考えあわせると，〈雨が　ふる〉の〈ふる〉もたぶんに機能動詞的である。名詞であらわされている現象が出現する，あるいは出現しているという点で，うえにあげた連語はすべて平行関係にある。現象の出現に対して，〈雨が　やむ〉〈氷が　とける〉〈虹が　きえる〉など現象の消滅の表現は，機能動詞結合とはなりにくい。

余談になるが，〈雨が　ふる〉にあたる英語の it rains, ドイツ語の es regnet, フランス語の il pleut, はいずれも名詞と動詞からなる表現であるけれども，動詞が実質的意味をにない，名詞は形式的である。ちなみに，ロシア語の Идёт дождь. あるいは Дождь идёт. においては，日本語と似ていて，動詞 идти（本来の意味は，行く・来る）が形式的である。これらの関係は，〈雪が　ふる〉など類似の表現についてもまったく同様である。

英語やドイツ語やフランス語では，自然現象をあらわす表現が，動詞を中心に展開されるのに比して，日本語やロシア語では名詞を中心とした表現形態をとるという彼此の相違は，対照言語学的な観点から興味ぶかい。

さて，固定連語と機能動詞結合との関係はどうか。

非動作名詞と実質的意味を欠く動詞とがむすびつくと，固定連語と機能動詞結合の中間的な連語ができる。たとえば，〈ブレーキを　かける〉〈アイロンを　かける〉〈日記を　つける〉〈辞書を　ひく〉〈写真を　とる〉などの連語が，このタイプとしてあげられる。これらの連語は，むすびつきが固定的である点で慣用句にちかいが，名詞の意味が連語のなかでいきていて，動詞の実質的意味が希薄である点で，機能動詞結合にもちかいといえる。名詞によってあらわされているモノが本来的に機能する場合の表現に，このようなタイプの連語ができるようである。もっとも自然なはたらきとして，ブレーキはかけるものであり，日記はつけるものであり，写真はとるものである。

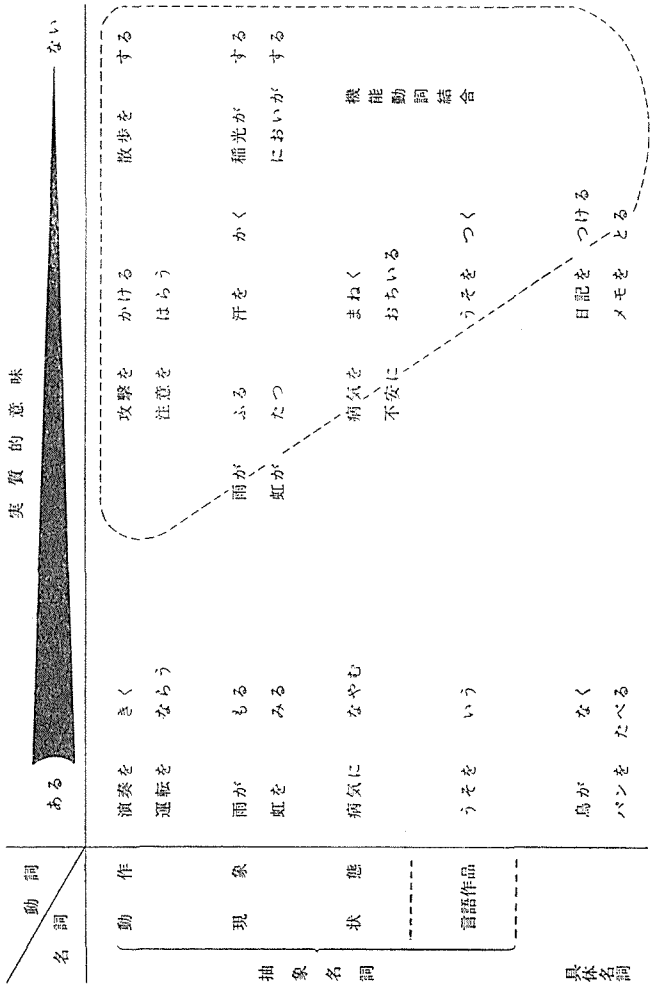
〈将棋を　さす〉〈碁を　うつ〉〈すもうを　とる〉なども同じ仲間であろう。

このことと関連して興味ぶかい現象がある。〈電話を　かける〉と〈電報をうつ〉や〈ノートを　とる〉と〈日記を　つける〉の関係である。〈電話〉と〈電報〉，〈ノート〉と〈日記〉は，同じ範疇の名詞であると論理的概念的には考えられるのであるが，一方は〈電話する〉〈ノートする〉という動詞とつながりをもつが，〈電報〉や〈日記〉はそのような動詞形がない。〈電話〉と〈電報〉，〈ノート〉と〈日記〉との間に，意味のうえではもちろん，文法的にも差がみとめられるのである。後者の仲間として〈コピー〉があるが，〈コピーを　とる〉〈コピーする〉の両形があり，〈日記〉よりも〈ノート〉にちかいといえよう。

自由度について説明を補足しておきたい。動詞に支配される同一の格の中での語彙選択の大きさをさすのであるが，固有名詞や数詞は無限ともいえるから除外すべきである。〈……を　しかめる〉は，……のところに〈顔／まゆ／目〉などきわめてかぎられた名詞しかこないが，〈……を　みる〉という連語では，……にたつ名詞は，およそ視覚の対象となるものならんでもよく，後者は前者より自由度が大きいとよぶ。語彙選択の自由度の差は，機能動詞結合の間にも当然ありうる。〈うける〉や〈かける〉のような動詞は，〈注意を／命令を／非難を／批判を／制限を／感化を／質問を／訊問を／……うける〉〈さそいを／攻撃を／号令を／相談を／電話を／期待を／疑いを／みがきを／……かける〉といった具合に多くの名詞と結合し，語彙選択の自由度が大きい。生産的な機能動詞といえるであろう。一方，〈よせる〉や〈あびる〉も，〈期待を／信頼を／回答を／支援を／……よせる〉，〈拍手を／注視を／注目を／批判を／……あびる〉などの機能動詞結合をつくる要素ではあるが，〈うける〉〈かける〉ほど生産的とはいえない。〈挨拶を／勉強を／検討を／議論を／見物を／いねむりを／わるふざけを／サーヴィスを／ドライヴを／……する〉の〈する〉は，機能動詞のうちでもっとも自由度が大きく，生産的なものといえるであろう。生産的な機能動詞は，文法的な性格がよりつよまって，接辞や補助動詞などにちかづいているとみられるであ

ろう。

動詞を核とする名詞との連語を，動詞の実質的意味と動作名詞，現象名詞などとの関係で視覚的に概観できるよう図示してみよう。



3.　機能動詞結合の諸特徴

機能動詞結合の文法的特徴，意味的特徴，文体的特徴などをあげていく。それぞれの特徴は，他の特徴からきりはなされてばらばらにあるのではなくて，他の特徴とたがいに関係しあっていることはいうまでもない。表記のうえでの特徴にも簡単にふれる。

3.1　結合のつよさ

機能動詞結合のむすびつきはつよい。

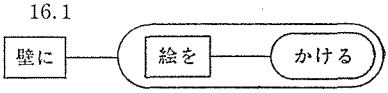
機能動詞結合をふくむ，さらに拡大された連語のなかで，機能動詞結合がひとつのまとまった成分として機能する。次の例で考察する。

(16)　壁に　絵を　かける
(17)　太郎に　さそいを　かける

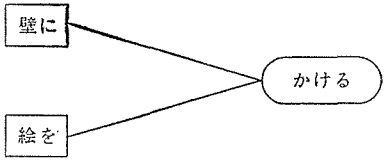
(16) の連語の構造は，16.1 のように，まず〈かける〉と〈絵を〉が結合しその全体と〈壁に〉が結合していると考えることも可能であるし，また，16.2のように，動詞とふたつの名詞（補語）とのむすびつきと考えることも可能である。少くともどちらか一方を否定する根拠がない。これに対して，(17) の連語は，17.1 にしめすような構造しか考えられない。〈太郎に〉と〈かける〉は直接むすびつくことができず（ただし，機能を考慮にいれない純粋形態統語論とでもいうべき領域では，このむすびつきも可能），16.2 のような構造とは解釈しにくい。

このことは，機能動詞結合が合成動詞になって，さらに拡大された連語の要素になっているのだといいかえてよいであろう。陳述やテンスな

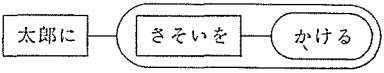
16.1



16.2



17.1



どが加わった伝達の単位である文のレベルに話を展開するならば，ここで述べたことは，機能動詞が単独では文の成分となりにくいこと，すなわち機能動詞結合全体で述語になっている，ということを意味している。

機能動詞結合においては，他の補語的な成分が，名詞と動詞の間に入りにくいことも特徴のひとつとしてあげられる。状況的な成分の場合には，この制限はゆるめられる（たとえば〈そっと／いつも〉など）。補語的成分とは述語のあらわすことがらの成立に直接かかわるものをいい，状況的成分とはその他の連用成分をいう。

(16) は自由連語の，(17) は機能動詞結合の，さらに (18) は固定連語のそれぞれ一例である。形式構造が同一であるこれらの三つの連語において，ニ格とヲ格の名詞をいれかえても，それほど不自然でないのは，(16a) であり，それに対して，(17a) はかなり不自然，(18a) は不可能と判断されよう。(17a) が不自然に感じられるのは，〈さそいを　かける〉のむすびつきのつよさをうらづけるものである。

(18)　経済不況に　拍車を　かける
(16a)　絵を　壁に　かける
(17a)?　さそいを　太郎に　かける
(18a)??　拍車を　経済不況に　かける

機能動詞結合は，問いかえしの文や質問の文においても特徴的である。〈さそいを　かける〉に対応する疑問形は〈何を　かける〉よりも〈どうする〉のほうが自然であろう。これは，より具体的な文脈・場面に依存する問題である。

3.2　名詞表現

名詞表現とは，ある名詞が文の核になっている表現構造をいう。たとえば，「山田は読書家だ」「交渉が進行中です」は，これらと意味内容がほとんど同じとみられる「山田はよく本を読む」「交渉が進行しています」との対比において名詞表現といえる。あとにあげた対応文は動詞表現である。下線

部（実線）の語が文の核になっていると考えられるからである。繋辞である〈だ〉や〈です〉は実質的意味がなくて単独では文や連語の中心にはなれないように，機能動詞もそえもの的な存在で，名詞のほうに中心がうつされ，その結果名詞表現ができあがる。動詞の意味するものを，さまざまな方法によって名詞のクラスに移行させ，名詞表現をつくっているのである。下にあげた左右のくみあわせは，動詞表現と機能動詞結合による名詞表現の差を対照的にしめしているといえよう。

彼は　まよった。	彼には　まよいが　あった。
抽象芸術へ　うつった。	(そこには)抽象芸術への移行が　あった。
会議が　ひらかれた。	会議の　開催を　みた。
意見が　まとまった。	意見の　一致／まとまりを　みた。

さらに名詞表現は，動作・作用・現象などをさししめす名詞が連体修飾を自由にうけて表現内容をくわしくゆたかにすることがある。次のような例がそうである。連体修飾には，名詞（19），形容詞（20），動詞（21），文（22）などがたちうる。

(19)　車の音がしてもおどろかず，＜開高健「パニック」

(20)　「誰だ？誰もいないぞ。」と内から太い声がした。＜野間宏「真空地帯」

(21)　波の音のあい間に風車の軋む音がしていた。＜小川国夫「アポロンの島」

(22)　生来の女好きで，患者に対して怪しからない振舞があったとか，＜水上滝太郎「大阪の宿」

名詞表現はまた，次のような並立構造を可能にすることもある。

(23)　自分という存在が，数限りない人々の羨望と怨みと妬みを浴びながら，＜伊藤整「火の鳥」

(24)　他都市とは逆のルートで誕生した同市の平和教育だが，行政と教育現場の二人三脚でどう成長させていくか，全国の注目と期待を集めている。＜毎日　78. 8. 1　朝

(25)　細心の注意と努力を払って自然環境を守りながら作業している。＜毎日　78. 8. 20　朝

これを動詞表現でいいあらわすならば，「人々から羨望されたり，怨まれたり，妬まれたり……」，「全国から注目され，かつ期待されている」のように

同じ並立構造でも，いくらか冗長的な表現となるであろう。これらのもっと単純な形態として，動詞性成分ふたつからなる複合名詞に〈する〉のついたもの，たとえば〈読み書きを　する〉〈行き来を　する〉のような連語がある。

名詞表現によって特徴づけられる文章は名詞文体とよべるであろう。評論や法律文，またひろく新聞など，書きことばの文章に名詞表現が多くみられるようである。

3.3 〈……する〉との交替

機能動詞結合には，〈……する〉と交替できるものがある。スルのヴァリアントとして〈……される〉〈……させる〉などのこともある。

機能動詞とは何か，のところで述べた〈においが　する⟷におう〉〈決定を　くだす⟷決定する〉などの交替である。〈援助を　あたえる⟷援助する〉〈敬礼を　おくる⟷敬礼する〉〈信頼を　よせる⟷信頼する〉〈理解を　もつ⟷理解する〉など，スルと交替する機能動詞結合は多い。

サセルと交替する例としては，〈(人生に) うるおいを　あたえる⟷(人生を) うるおわせる〉〈感動を　よぶ⟷感動させる〉〈優勝に　みちびく⟷優勝させる〉などがある。また，〈理解を　える⟷理解される〉〈信頼を　あつめる⟷信頼される〉〈支配を　うける⟷支配される〉などは，サレルと交替する例である。これらについては，あとのヴォイス的表現のところでくわしくふれる。

機能動詞結合をめぐって，行為中心の表現スルとできごと中心の表現アルとの交替現象をみることができる。たとえば，〈(太郎が) 動揺する〉〈(太郎が) 動揺を　おこす〉〈(太郎に) 動揺が　おこる〉〈(太郎に) 動揺が　ある〉は，スル——アルの連続的な交替とみられるし，〈攻撃を　かける〉〈攻撃をうける〉〈攻撃が　ある〉の場合には，スル——サレル——アルの交替とみることができよう。

このスル，アルなどの交替形が存在することは，機能動詞結合かどうかのきめてになるひとつの目安ではある。ただしこの対応形をもつことは，機能

動詞結合に対しての十分条件にすぎず，必要条件ではない。〈音が　する〉〈味が　する〉〈気が　する〉などは対応形をもたないが，〈においが　する〉〈感じが　する〉と平行する表現であり，機能動詞結合と考えられる。同様に，〈食事を　とる〉〈朝食を　とる〉の連語で，前者は〈食事(を)する〉と交替し，後者は対応形をもたないけれども，いずれの〈とる〉もひとしく機能動詞とみるのが妥当であろう。

3.4　格支配

動詞には，それぞれ固有の，主として名詞句とむすびつく格支配の現象がみられる。格支配という用語にかわって最近では，結合価という用語もつかわれつつある（仁田1974，村木／堀江1974など）。同じ知的意味をもつ，〈太郎が　次郎を　さそう〉と〈太郎が　次郎に　さそいを　かける〉において，〈さそう〉はガ格，ヲ格を支配する二項動詞，〈かける〉はガ格，ヲ格，ニ格を支配する三項動詞である。ここで〈さそいを　かける〉は〈さそう〉に対応するが，相手をあらわす名詞は，前者がニ格の名詞，後者がヲ格の名詞というふうに形態的にちがった格とむすびつく。〈刺激を　あたえる〉はニ格を，〈刺激する〉はヲ格を支配するから，これも同様のタイプの支配関係にある。

一方，〈影響を　あたえる〉と〈影響する〉はともに，ニ格の名詞とむすびつく。この場合，格支配にちがいはみられない。〈実行に　うつす〉と〈実行する〉もともにヲ格を支配する。

受動の代替表現ともなる〈批判を　あびる〉〈攻撃を　うける〉などの場合は複雑である。〈批判される〉や〈攻撃される〉は動作主がニ格あるいはカラ格であわされるが，機能動詞結合ではカラ格または連体修飾ノあるいはカラノによってあらわされる。すなわち，〈敵から　攻撃を　うける〉〈敵の攻撃を　うける〉〈敵からの攻撃を　うける〉の三形態がある。

同一の動詞について，実質動詞としての格支配と機能動詞としての格支配にちがいがみられることもある。

〈まもる〉という動詞はふつう〈伝染病から　子供を　まもる〉のようにヲ格と同時にカラ格の名詞ともむすびつくが，〈沈黙を　まもる〉という機能動詞としての用法では，カラ格とむすびつくことがない。〈本箱から　本をとる〉と〈休養を　とる〉も，実質動詞と機能動詞の格支配における差をしめすものといえる。〈休養を　とる〉は，カラ格の名詞とむすびつかないであろう。

機能動詞結合全体が，もとの実質動詞がとらなかった，あらたな別の格を支配することがある。〈連絡を　とる〉がト格あるいはニ格とむすびつく場合がそうである。相手をあらわすト格やニ格の名詞を支配するのは，動作名詞である〈連絡〉か，あるいは〈連絡を　とる〉という連語全体である。

3.5　文法的意味

機能動詞表現が，ⓐヴォイス的な意味，ⓑアスペクト的な意味，ⓒムード的な意味を積極的に特徴づけることがある。

ⓐⓑⓒは一般にいずれも語彙的意味と対立をなす文法的意味とよばれるものである。これらは純粋に文法的なカテゴリーとして，文法的な手つづきによってあらわれされることもあるが，ときには語彙的に，あるいは語彙文法的な手つづきでしめされることもある。機能動詞結合による，これらの文法的意味の表現は，語彙文法的な手つづきのひとつである語彙統語論的な方法によるものといえる。文法的意味は，ひとつがとくに特徴づけられることもあるが，いくつかの特徴が混在していることもある。

3.5.1　ヴォイス的な意味

3.5.1.1　受動表現

機能動詞結合が受動表現とかかわりをもつということは意味論的なカテゴリーをとおしてのことであって，

太郎が　次郎に　さそいを　かける

↕

次郎が　太郎に／から　さそいを　かけられる

のような，いわば純粋の文法的ヴォイスをここで問題にするのではない。〈批判を　あびる〉や〈評価を　える〉は，文法的には基本のたちば，あるいは，受動との対比において，能動のたちばであるけれども，意味的には受動表現といってよいものであろう。これらの連語は，すでに何度も述べてきたように，〈批判される〉〈評価される〉と交替でき，間接的にも受身の表現であることをうらづけている。これらの受身表現は，語彙統語論的な手つづきによってあらわされているものといえる。くみあわさる動詞や名詞の語彙的意味にささえられ，かつ連語という統語論的な手つづきによって，ふたつの単語の間係から，受動の意味がうまれるからである。

ここで，現代日本語の受動表現にどのような手つづきがありうるかを簡単に整理してみよう。

①語彙的（語彙形態論的）

みつかる，つかまる，などの受動動詞。

能動文「警察は　犯人を　つかまえた」に対する受動的意味をもつ文「犯人は　警察に　つかまった」。ただし，この受動文と競合する，もうひとつの受動文「犯人は　警察に　つかまえられた」は②の形態論的な手つづきによるもの。〈つかまえる――つかまる／つかまえられる〉の能動――受動の関係はどの場合にもなりたつわけではなく，主語になにがくるかによって，この競合関係がこわれることもある。

みつかる――みつける，つかまる――つかまえる，はもともと自動詞と他動詞の対立であるが，語彙的に自動詞が受動動詞とかさなりあっている。なお，受動動詞は接尾辞-aru がつくという点で形態論的な手つづきともいえるが，この場合，一般性に欠け，個々の単語（動詞）に依存していて，その数もかぎられている点で語彙的である。

②形態論的

動詞の語幹に接尾辞 -Rare-ru のついた受動形。

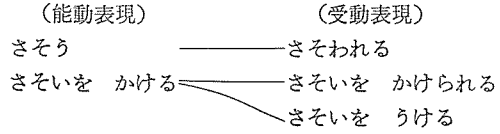
受動をあらわすもっとも一般的な手つづきで，狭義の受動表現は，この -Rareru の形式をそなえたものによる表現のみをさす。-Rare-ru は，-rare-ru と -are-ru が異形態であることをしめす。みる⟶みられる，なぐる⟶なぐられる，のような派生動詞による受動形。

③語彙統語論的

機能動詞結合によるもの。

この稿でとりあげる受動表現で，〈批判を　あびる〉〈評価を　える〉のような統語論的であると同時に語彙的な表現。あとでしめすように，さまざまな，しかしあるかぎられた動詞によってこのような受動表現が可能である。これは，たとえば英語の（be 動詞）＋（過去分詞）による受動表現と，統語論的な手つづきによるという点で似ているけれども，形式化一般化されていない点で語彙的という性質がくわわる。英語で，ときに，have, get, become などの動詞（補助動詞化している）が受動構文をつくるのにちょうど似ている。たとえば，I had the book stolen. のひとつの意味は「本をぬすまれた」である。(注6)

語彙統語論的な手つづきによる受動表現は，その意味がすでに受身態であるので，形態論的な受動形をつくることがない。下の図で〈さそいを　うけられる〉という連語はもはや成立しない。



〈さそう——さそわれる〉〈さそいを　かける——さそいを　かけられる〉の関係は基本と派生の関係で，unmarked——marked の対立であるが，〈さそいを　かける——さそいを　うける〉は対称的ともいえる対等の対立をなしている。

〈さそいを　うける〉や〈批判を　あびる〉などの機能動詞表現は，②の受動表現の代用として用いられているようである。このような受動の代用表現としての機能動詞結合をかたちづくる動詞に，**あつめる**，**まねく**，**える**，**かう**，**うける**，**あびる**，**こうむる**，**くう**，**くらう**，**あう**，**あずかる**，**ある**，**かかる**，などがある。**あつめる**以下**くらう**までの動詞は，ヲ格の名詞を支配する，いわゆる他動詞であるが，機能動詞結合の場合には他動性はなくむしろ全体で自動詞のようなはたらきをしている。これらの動詞はいずれも主格（ガ格）でしめされるものに対して内心的なうごき（場所の変化，所有権の移動，包摂，摂取などの表現で，うごきが主体にむかっている）をあらわしている点で，再帰性という共通した性質がみとめられる。**あう**と**あずかる**はニ格支配，**ある**と**かかる**はガ格の名詞とくみあわさって受動表現になることがある。**ある**は状態の受動を特徴づけ（太郎から　さそいが　ある），**かかる**は始動のアスペクトをも特徴づけている（太郎から　さそいが　かかる）と思われる。

機能動詞結合による受動の表現には，しばしば，やりもらいのカテゴリーのうちの〈……てもらう〉との出入りがみられる。たとえば，〈承認を　うける〉〈許可を　える〉などの表現は，〈……される〉〈……てもらう〉のいずれにも交替することがある。

以下，受動表現をつくる機能動詞結合をリストアップしていく。

あつめる

(26)　大平幹事長の動向が党内外の注目を集めているが，＜毎日　78.8.1　朝

(27)　仁科氏は全員の信頼を集めて「社長」というなれない経営者の位置につかねばならなかった。＜藤田信勝「物質の根源と宇宙を結ぶ」

期待を ～　羨望を ～　評価を ～　信望を ～　尊敬を ～
支持を ～

あびる

(28)　五回まではまずまずの投球をしながら六回，長打を浴びて降板した。＜毎日　78. 8. 9　朝

(29)　カレン・アン・クインラン嬢の命をめぐっての法廷論争は，二年前全米の注視をあびた事件だった。＜毎日　78. 8.12　朝

拍手を ～　喝采を ～　痛打を ～　攻撃を ～　注目を ～
批判を ～　非難を ～　質問を ～

〈……を　あびる〉は，〈……を　あびせる〉と受動・能動の対立をなす。

(30)　野党から批判を浴びている岡原最高裁判長官＜毎日　78. 7. 1　夕

(31)　ベトナムが激しい批判を浴びせたこととあわせ，＜毎日　78. 8.17　朝

(32)　野党の非難を浴び，パニックにおびえて，＜開高健「パニック」

(33)　その団体に属する人物が各国代表の中にまぎれ込んで捕鯨国日本に対する非難を浴びせる。＜毎日　78. 7. 1　夕

うける

(34)　そこだけ家具の入っていた階下の小部屋で茶菓のもてなしを受けた時，＜野上彌生子「真知子」

(35)　ついに公判のときには裁判長ににくまれて注意をうけるような破目になったという話もした。＜野間宏「真空地帯」

ゆるしを ～　あつかいを ～　うたがいを ～　あなどりを ～　よびだしを ～　てあてを ～　うらみを ～　さばきを ～　しかえしを ～　(お)しかりを ～　取調べを ～　手入れを ～　あおりを ～　質問を ～　訊問を ～　詰問を ～　拷問を ～　待遇を ～　厚遇を ～　支配を ～　束縛を ～　催促を ～　勧告を ～　宣告を ～　監督を ～　砲撃を ～　攻撃を ～　反撃を ～　迫害を ～　追放を ～　圧迫を ～　復讐を ～　報復を ～　拒絶を ～　妨害を ～　暴行を ～　命令を ～　注意を ～　許可を ～　勧誘を ～　誤解を ～　反対を ～　相談を ～　要請を ～　依頼を ～　請求を ～　祝福を ～　援助を ～　支援を ～　非難を ～　批判を ～　冷笑を ～　嘲笑を ～　侮辱を ～　評価を ～　影響を ～　作用を ～　制限を ～　処分を ～　感化を ～　抜てきを ～　庇護を ～　看護を ～　優待を ～　薫陶を ～　尊敬を ～　信頼を ～　所望を ～　期待を ～　連絡を ～　訪問を ～　招待を ～　歓迎を ～　変形を ～　注文を ～　号令を ～　虐待を ～　摘発を ～　攻略を ～　刺激を ～　サーヴィスを ～

ただし，次の連語は〈……する〉と交替しうる。

感動を ～　感銘を ～　感激を ～　迷惑を ～

える

(36)　いい指導を得た子供たちの油絵は，＜毎日　78. 8. 16　夕

(37) 需要産業界である組み立て加工産業に対し「共存共栄を目指し，理解を得たい」と強く訴えている。<毎日 78. 8. 17 朝

ゆるしを ～ あわれみを ～ 許可を ～ 推薦を ～ 庇護を ～ 納得を ～ 承諾を ～ 承認を ～ 快諾を ～ 了承を ～ 許諾を ～ 賛成を ～ 啓示を ～ 支持を ～ 援助を ～ 拍手を ～ 協力を ～ 評価を ～ 賞讃を ～

動詞**える**による機能動詞結合は，受動表現の代用であるばかりではなく，やりもらいのカテゴリーのうち，〈……てもらう〉の代用表現になることも多い。また，次のような例では，〈……する〉と交替しうる。

(38) 旅行中にもこの初稿に手を加え，帰国後も加筆を続けて，ついに一応のまとまりを得たので，<亀山健吉「フンボルト」

おちつきを ～ 満足を ～ 勝利を ～ 安心を ～

えるには，次の例のように可能の意味を特徴づけるムード的な用法もある。これは，〈……できる〉と交替しうる。接尾辞あるいは複合動詞をつくる要素としての〈……しえる／しうる〉が可能の意味をそえる事実たとえばyom-eru, kak-eru など）と平行関係にある。

(39) 長寿を得たとしても，決して好ましい運命に遭遇したとは思えません。<亀山健吉「フンボルト」

かう

(40) だが，性急な近代化の強行は，左右両派からの反発を買った。<毎日 78. 8. 22 朝

(41) 自然保護団体の怒りを買っているトラの胎児のはく製<毎日78. 8. 16 朝

笑いを ～ やっかみを ～ うらみを ～ 反感を ～ 苦笑を ～ 非難を ～ 顰蹙を ～

くらう

(42) 期待の西本がめった打ちをくらっただけに「ちょっとピッチャーをみないといかんなときびしい顔。<毎日 79. 3. 25 朝

(43) 「無死ならともかく，一死だと併殺をくらったらおしまいだもの」<毎日 79. 4. 30 朝

頭つきを ～ 強打を ～ 満塁ホームランを ～ 長打を ～ 平手打ちを ～ 懲罰を ～ うっちゃりを ～ 反撃を ～

まねく

(44) 防衛庁長官として，また政府要人として，誤解を招きやすい軽率な発言

といわなければならない。<毎日　78. 8. 2　朝

(45)　彼の強大に畏縮し円滑を主として曲げて彼の意に従順するときは軽侮を招き，<阿部次郎「人格主義」

反発を ～　反感を ～　批判を ～　非難を ～

ただし，次の連語は〈……する〉と交替しうる。

対立を ～　混乱を ～　分裂を ～　暴落を ～

また，次の連語は〈……に　なる〉と交替しうる。

結果を ～　状態を ～　危険を ～　病気を ～

よぶ

(46)　米人コンサルタント，ハリー・カーンの暗躍がクローズアップされて注目をよんでいるが，<文芸春秋　79. 6

(47)　死を選ぶ一方で，まぬがれて恥じない人たちもいることが世間の怒りを呼ぶのである。<毎日　79. 2. 2　朝

注意を ～

こうむる

(48)　お師匠様は道のために，お上(かみ)のおとがめをこうむって御流罪(ごるざい)におなりあそばしたのでございます。<倉田百三「出家とその弟子」

(49)　世間の誤解――というのが既に自惚(うぬぼれ)かも知れませんけれど，とかく非難を蒙った覚えもあります。<里見淳「多情仏心」

おしかりを ～　影響を ～

ただし，次の連語では，〈……する〉と交替しうる。

迷惑を ～　欠損を ～

あう

(50)　世紀の虚報“架空会見”なんて世論の袋だたきにあいはしないかと今はそれだけが心配だ。<サンデー毎日　79. 2. 11

(51)　ムーサさんが，その夜くつろいだ自由時間に，二人の若い日本人女性から質問攻めにあっていた。<毎日　78. 8.31　朝

攻撃に ～　追撃に ～　襲撃に ～　追い討ちに ～

あずかる

(52)　菊作りの秘訣の伝授にあずかりたいという下心が，<中山義秀「厚物咲」

(53)　これはお尋ねにあずかって恐縮至極でございますな。<芥川竜之介「戯作三昧」

(御)指名に ～　おほめに ～

ある

(54) 今朝，西田から電話がありました。<別役実㊐「戒厳令」

(55) 「君からプロポーズがあったから，今夜はホテルをリザーブしたんだよ」
<山田信夫㊐「華麗なる一族」

報告が ～　連絡が ～　照会が ～　応酬が ～　など多数。

あるは状態の受動表現をつくる，とさきに述べた。ふたつめの実例をパラフレーズして，(ｉ)君がプロポーズした　(ii)君から／君にプロポーズされた(iii)君から（の）プロポーズがあった，のみっつの文を対比してみると，(ｉ)が動作中心の表現（動作主と動作が主語・述語の関係になっている）で(iii)は，できごと全体を状態的にとらえている表現，(ii)はそれらの中間といえよう。受動構文というのは一般に動作よりもできごとに焦点をあわせた表現であると思われる。動作主が明示されないことも多く，明示されたとしても二次的であって，できごとのほうに中心がある。機能動詞の**ある**を用いた状態受動表現は，動作表現と対応することがらを，できごと中心に述べるのに役だっている。動作が及ぼされるヒトやモノは，ニ格の名詞で表示される。

かかる

(56) 友人から誘いがかかると，私のとめるのもきかずに行ってしまうのです。<毎日　78. 6. 7　朝

(57) ウチの方にも，とお呼びがかかった。<毎日　78. 8.19　朝

うたがいが ～　みがきが ～　期待が ～　相談が ～　注文が ～　号令が ～　依頼が ～　命令が ～　圧迫が ～　攻撃が ～　制限が ～　招待が ～

〈さそいを　かける〉と〈さそいが　かかる〉が能動・受動の対立関係をしめすが，これは，他動詞・自動詞という語彙的，あるいは厳密には語根が同じであるという語彙形態論的な（さそいを　かける：うける　がより語彙的であるのに対して）たすけによるのである。動作の及ぶヒトやモノはニ格によって，動作主はカラ格またはカラノという連体規定によってあらわされる。

このような他動詞と自動詞が対になった機能動詞表現にほかにもいくつかの例がみられる。たとえば，以下にしめす**くだす**と**くだる**，**あつめる**と**あつ**

まるなど。

(58) 金子コミッショナーは，巨人軍から出されていた提訴に対し，きびしく「却下」の裁定をくだした。<毎日 78.12.22 朝

(59) 阪神の予想通り「巨人と江川の契約は無効」のコミッショナーの裁定が下ったものの，<毎日 78.12.22 朝

(60) こうした両国の関係がアンドレイ外相の訪ソによってどれだけ修復されるかに注目が集まっていたが，<毎日 79. 2. 3 夕

(61) "大福対決"の一方の当時者である大平幹事長の動向が党内外の注目を集めているが，<毎日 78. 8. 1 朝

動詞**みる**が動作名詞と結合して，能動とも受動とも解釈できるような表現になることがある。ここでは，能動と受動の対立が中和している。**みる**が機能動詞として用いられるときは，ふつう動作主は表現されないようである。かたい種類のかきことばで，主体を明示しない表現として，この用法が使われているように思われる。**える**，**かう**，**まねく**にもこれと似た現象がある。

(62) 金大中の選挙違反裁判はまだ決着をみていないが，<毎日 78.8.17 朝

(63) むろん，軍縮問題は四大国としても自己の運命にかかわる重大問題だから，早急な解決をみるとは誰も予想していなかった。<毎日 78.10.15 朝

決定を ～　合意を ～　完成を ～　開催を ～　抵抗を ～　布告を ～　公表を ～

3.5.1.2　他動＝使役表現

現代日本語の使役表現は，動詞の語幹に -Sase-ru (-sase-ru/ase-ru が異形態）という接尾辞がついた動詞の使役形がつかわれるのがもっとも一般的であるが，〈よます，かかす，きかす，……〉などの接尾辞 -as-u のついた使役動詞もよく用いられる。受動動詞はごくかぎられた少数の動詞であったが，使役動詞は〈よめる，かける，きける，……〉などの可能動詞と同様に生産的であって，語彙的というよりは多分に語彙形態論的な手つづきによるものといえる。ところで，ここでは，他動＝使役表現という用語を用いることにする。はたらきかける対象が人であるかそれ以外であるかによって他動と使

役が微妙に交錯するのであるが，ここでは他動と使役を区別しないで一括してあつかうことにする。

他動＝使役表現をつくる機能動詞として，**あたえる**，**うながす**，**うばう**，**かける**，**さそう**，**つける**，**みちびく**，**よぶ**，などがある。**みちびく**はニ格の名詞とくみあわさり，他の動詞はいずれもヲ格の名詞とむすびついて，機能動詞表現ができる。

あたえる

(64) 専攻以外の教養としては文学はまことに優雅なもので，人生にうるおいを与えてくれるものだと思います。<サンデー毎日 78. 8. 13

(65) まずその家の小ぎれいさが，彼に安心をあたえた。<椎名麟三「神の道化師」

よろこびを ～　たのしみを ～　かなしみを ～　くつろぎを ～　おちつきを ～　感銘を ～　感動を ～　変形を ～　休養を ～　安定を ～　動揺を ～　満足を ～

あたえるは能動態と対応する機能動詞結合をつくることもある(3. 5. 1.4参照)。

うながす

(66) 自我の確立期にある学生に，社会の一員としての自覚を促すことは大切だ。<毎日 79. 2. 8 朝

(67) これがさきにのべた陽電子の発見であり，ディラックの電子論のいちじるしい進歩を促す動機となった。<坂田昌一「原子物理学の発展とその方法」

うばう

(68) セラノは五回右ショートストレートでダウンを奪った後も，<毎日 78. 11.27 朝

(69) 快調なテンポで4イニングを被安打2本に抑え，5三振を奪った。<毎日 79. 3.27 朝

かける

(70) やは，苦労かけたな，と云って高橋少佐が帰って来た。<火野葦平「麦と兵隊」

(71) それでも近くの人がお祝いの花束を持って訪問すると「いろいろご心配をかけまして」と笑顔を見せた。<毎日 79. 2. 1 夕

迷惑を ～　負担を ～　集合を ～　ストップを ～

うえにあげた〈集合を　かける〉は，あるいは〈集合の号令を　かける〉のつづまったものか？　さらに〈ストップを　かける〉も同様か？

さそう

(72)　妙なくすぐりで笑いを誘おうとしたりすれば，<毎日　79. 1.30　朝

(73)　相手投手の動揺を誘うとともに，<毎日　78. 8. 20　朝

みだれを ～　発汗を ～

つける

(74)　ネックポイントで着込み分を上げて肩先と結び，肩線にふくらみをつけます。<婦人生活　56.11

(75)　この状態で，毛髪に変形を与える。たとえばカールをつける。<桜田一郎「新しい繊維」

まるみを ～　おわりを ～　(「事件に終わりをつける」<横光利一「機械」　決着を ～　変化を ～

みちびく

(76)　横威主義的職業政治屋が人類を破滅に導くごとき計画を，<渡辺慧「原子党宣言」

(77)　“四十八年のセンバツで優勝に導いた渡辺監督は，<サンデー毎日　78. 8.13

成功に ～　失敗に ～

よぶ

(78)　「アンネの日記」で世界中に感動を呼んだ少女アンネ・フランクのノートを，日本で初めて翻訳しました。<毎日　78. 8. 1　夕

3.5.1.3　使役の受動表現

使役の受動態〈……させられる〉と交替しうる機能動詞表現がある。たとえば，動詞**喫する**とくみあわせる機能動詞結合である。さきにあげた〈迷惑をうける〉〈損害をこうむる〉なども〈……する／させられる〉と交替できそうで，ここにいれてよいかどうか微妙なところである (3.5.1.1 参照)。

喫する

(79)　昨年韓国に完敗を喫している日本は<毎日　78. 8.19　朝

(80)　ベトナム侵略戦争の歴史的敗北を喫して以後，<毎日　78. 8. 9　朝

大敗を ～　惨敗を ～　負けを ～　ダウンを ～

3.5.1.4　相互態

相互態とは，意味的に相互的な動作を表現する場合の文法的側面であり，ヴォイスのひとつのカテゴリーである。主格（ガ格）と対称格（ト格），あるいは対格（ヲ格）と対称格との間に出入りがみられ，〈……しあう〉と交替しうる。相互態をつくる機能動詞に**かわす**と**むすぶ**がある。

かわす

(81)　ここにわれわれの決意を披瀝し，その盟約を交す次第である。<山田信夫㊐「華麗なる一族」

(82)　綿貫さん，その“大の字”を盃に映して，お互にそれを飲み干し，契りを交そうじゃありませんか<同上

挨拶を ～　契約を ～　愛撫を ～　抱擁を ～　握手を ～

むすぶ

(83)　オランダのヨハン・ニースケンスが，また米国の「ニューヨーク・コスモス」と十一日，契約を結んだ。<毎日　79. 6. 13　朝

(84)　これに対抗し，輸入品の数量や価格などについて買い手，つまり消費国側が協定を結び，<毎日　79. 6. 26　朝

3.5.1.4　基本態と対応する機能動詞結合

受動や他動＝使役の意味をもった機能動詞表現をさきにあげたが，もっとも多くみられるのは，ヴォイスの基本となるいい方，基本態である。基本のたちばは，しばしば〈……する〉と交替する。そのような例を列挙していく。アスペクトやムードの，ある側面を積極的に特徴づけるものについては，あとでとりあげるのでここでははぶいてある。なお基本のたちばは，受動との対比において能動のたちばとなる。しかし，「太郎が　まばたきをする」のような文は能動・受動の対立から解放されている。これも基本のたちばにはいる。

あげる

(85)　倫は何げなくその薄い紙に眼を落して思わず小さい叫びを上げた。<円地文子「女坂」

ひびきを ～　笑いを ～　名のりを ～

(86) 縞のエプロンをかけた素人産婆と見える婆さんが膝で立って，手を押しもみながら一心不乱のていでお祈りをあげていた。<井伏鱒二「本日休診」
焼香を ～　勝利を ～

あたえる

(87) 自然は，ただその可能に対して或程度の保証を与えているにとどまる。<阿部次郎「人格主義」

(88) 音読する自分の声が迫力を伴って頭脳に刺激を与えるシカケなのだ。<週刊文春　79. 6. 14
保護を ～　援助を ～　声援を ～　注意を ～　はげましを ～　影響を ～　解決を ～　答えを ～　解答を ～　裏づけを ～　命令を ～　指示を ～　示唆を ～　解放を ～　暗示を ～　返事を ～　一瞥を ～　侮辱を ～　感化を ～　許可を ～　承諾を ～　説明を ～

〈はげましを　あたえる〉〈注意を　あたえる〉などの連語では，ときに，やりもらいのカテゴリーのうち，〈……てやる〉の代用表現にもなるようである。

あたる

(89) 九月二日までに細目を決め積極的に行政指導にあたる。<毎日　78. 8. 25　夕

(90) ポンプ車十八台が消火にあたった。<毎日　78. 8. 17　朝

ひきうける，従事する，の意味にちかい**あたる**の使用例の多くは〈……する〉と交替する。このくみあわせは数が多い。

いれる

(91) 二人は互いに捜(さぐ)りを入れるような目付して，<島崎藤村「破戒」

(92) もっとも重要なる案件でありしことは，今日疑いを容るる余地なきを誰も知っていながら，<長岡半太郎「総長就業と廃業」
詫びを ～　説明を ～

(93) 他の仕事でも同じだと思うんですが，余計なことを考えに入れてはいけない，と思うんです。<大仏次郎「帰郷」

(94) 都市化が進み密着化した名古屋の都市変容をまったく考慮に入れずに，<毎日　79. 3. 31　朝

ほかにも，〈電話を　いれる ≒ 電話する〉，〈御覧に　いれる ≒ みせる＋(敬意)〉のような機能動詞表現もある。

うつ

(95) 婉曲にその旨を説明して，逃げをうつことです。<商店界　56.11

(96) これは，強心剤と栄養剤の注射を打ったということです。<新藤兼人㋟「わが道」

タイプを ～　なげを ～　寝返りを ～

うばう

(97) 加藤英が１―２後のシュートをバックスクリーン右へ打ち込んでリードを奪い，<毎日　79. 4. 30　朝

(98) 岡島は完全に余った形でフリーとなり，やすやすとゴールを奪った。<毎日　79. 4. 30　朝

おう

(99) 登山者二人が落雷に遭い二人が重軽傷を負った。<毎日　78. 7. 29　朝

(100) 並木さんは顔にけがを負い，<毎日　78. 7. 29　朝

おかす

(101) よほど控え目な態度でかからないと大変な間違いを犯す。<毎日　79. 3. 13　朝

(102) 連続強盗を犯した水兵に対し下されたもので，<毎日　78. 8. 8　夕

あやまちを ～　思いすごしを ～　失敗を ～　ミスを ～　殺人を ～　誤謬を ～　危険を ～　罪を ～　犯罪を ～　失礼を ～　矛盾を ～

おくる

(103) 国文学会における，スーパー・スターの活躍に拍手喝采して声援をおくるひとりだが，<毎日　78. 10. 2　朝

(104) 山室さりげなく手を挙げて合図を送った。<石森史郎㋟「約束」

拍手を ～　敬礼を ～　称賛を ～

(105) それら少数民族の中でも独特な遊牧生活をおくっているカザフ族，<毎日　79. 3. 13　夕

おこす

(106) ゴルフ場か，と錯覚をおこす広い芝生，<毎日　78. 8. 1　夕

(107) 大体ペニシリンを使用した人のうちで約二・五パーセントか，一〇パーセントくらいの頻度でアレルギー反応を起す人があります。<婦人倶楽部　56. 6.

あらそいを ～　まちがいを ～　うったえを ～　ごたごたを ～　混乱を ～　反応を ～　反逆を ～　失敗を ～　暴動を ～　反射を ～　融合を ～　流産を ～　動揺を ～　変形を ～　繁殖を ～　感動を ～　爆発を ～　故障を ～　決心を ～

以上の連語のなかには，〈まちがいが　おこる〉や〈動揺が　おこる〉のよ

うな自動詞**おこる**とくみあわさった連語と対応するものがある。一般に，他動詞**おこす**を用いた表現は，動作を重視したものとなり，自動詞**おこる**を用いた表現は，できごとを重視した表現になるようである。

(108) 格子をかぶせる時期を誤り，とんでもないまちがいをおこす。<坂井利之「文字を読む機械」

(109) 一週間の勤務を続けて，緊張感がとけようとする寸前に，えてして間違いが起こる。<毎日 78.11.25 朝

おこなう

(110) 空港でホメイニ師は短いあいさつを行い，<毎日 79. 2. 2 朝

(111) 海運集約化，石炭鉱業の撤退など，重要な産業政策のとりまとめを行った戦後の代表的財界人<毎日 78. 8. 2 朝

給油を ～ 回転を ～ 運動を ～ 加工を ～ など多数。

おさめる

(112) 四十五年には当時蔑視されていた浅草六区に初進出して大成功をおさめた。<毎日 79. 3. 12 朝

(113) 人間性の怒れる力が，人間性を踏みにじる勢力に勝利をおさめるものだとの厳粛な警告<毎日 78. 7. 1 夕

サヨナラ勝ちを ～ 中押し勝ちを ～

およぼす

(114) この勝敗は，得点の出入りに相当な影響を及ぼすとみられる。<毎日 78.11. 22 朝

(115) 領民に直接の支配を及ぼすという<亀山健吉「フンボルト」

かける

(116) 中国は外国の民間銀行や公的な輸出入銀行からの借款に期待をかけているとみられる。<毎日 79. 3. 12 朝

(117) 大会までに，守備を重点にさらに磨きをかけたい。<サンデー毎日 78. 8. 13

思いを ～ さそいを ～ うたがいを ～ おどしを ～ 追い討ちを ～ ゆさぶりを ～ 斬り込みを ～ 憎しみを ～ 攻撃を ～ 夜襲を ～ 嫌悪を ～ 信用を ～ 相談を ～ 号令を ～ 圧迫を ～

きる

(118) セ・パ両リーグとも四月七日の開幕目ざし，本格的トレーニングのスタートを切った。<毎日 79. 2. 1 夕

(119) 避けきれなかった大型トラックが突然左にカーブを切って飛びだしてき

た。<文芸春秋　79. 9」

くだす

(120) 米政府関係筋は日本が石炭液化事業に共同参加する決断を下すことが先で，<毎日　78. 8.24　夕

(121) しかし，そのことをもって今度の入試改革に評価を下すのは，<毎日　78. 8. 17　朝

解釈を ～　回答を ～　観察を ～　命令を ～　宣告を ～　裁定を ～　裁判を ～　結論を ～　判断を ～　断定を ～　決定を ～　推定を ～　診断を ～　断を ～

しめる

(122) ファシズムが潰(つい)えて，所謂(いわゆる)，民主主義が勝利をしめようが，<遠藤周作「白い人」

(123) 心配と嬉しいことが胸の中で，ごったになって争うたけれど，とうとう嬉しい方が勝を占めて終った。<伊藤佐千夫「野菊の墓」

沈黙を ～

だす

(124) 昼すぎ，対局場に一番乗りした丸田九段は，放送の撮影準備に，あれこれ注文を出した。<毎日　79. 3. 1　夕

(125) ら致を助けておったんじゃなくて『殺しちゃいかん』という指示を出しておる。<毎日　78. 8. 12　朝

こたえを ～　ゆるしを ～　声明を ～　通達を ～　宣言を ～　通知を ～　指令を ～　命令を ～　許可を ～　結論を ～　指示を ～　解答を ～　返事を ～　サインを ～

たてる

(126) それは人けのないこの廊下の中で烈しい金属的な響きを立てる。<福永武彦「飛ぶ男」

(127) 目をつぶると，ぐーんぐーんと唸りをたてて，あたまの壁が廻りだした<里見淳「多情仏心」

ささやきを ～　つぶやきを ～　音を ～　声を ～　いびきを ～　など（音響に関する現象名詞）を　たてる

(128) 切支丹でないと誓えと云われれば平気で偽の誓いも立てますしね。<長与善郎「青銅の基督」

(129) 遽かに伴子は涙を見せまいとする覚悟を立てた。<大仏次郎「帰郷」

うかがいを ～　志を ～

(130) しかしちゃんと暮しを立ててきたんじゃないか。<石川達三「人間の壁」

(131) にいか偉い経営者が出て，あらかじめ計画を立てたとて，<河川肇「貧乏物語」

(132) お島は当素法(あてずつぽう)な見積を立てて<徳田秋声「あらくれ」

目論見を ～　予定を ～　予想を ～

つける

(133) 運命の奴が，皮肉な，しめくくりをつけようとしている。<大仏次郎「帰郷」

(134) 松子の母は待兼て，何時も物和かな有様の細君に，交渉をつけた。<滝井孝作「無限抱擁」

つぐないを ～　ねらいを ～　見切りを ～　見通しを ～　おわりを ～　区別を ～　始末を ～　説明を ～　解決を ～　注文を ～　決着を ～　連絡を ～

とる

(135) テレビ朝日が他局に比べて決定的におくれをとっているのは，<サンデー毎日　78. 8. 13.

(136) 逮捕当時もその人物とひそかに連絡をとっていたことが判明した。<毎日　78. 9. 12　夕

やすみを ～　休養を ～　休息を ～　睡眠を ～　食事を ～　平均を ～　指揮を ～　表現を ～　リードを ～　メモを ～

はたらく

(137) 東京都内の中学生が，高校入試に失敗し，通行人の店員に暴行を働いたという。<毎日　79. 3. 19　朝

(138) それでも懲りずに盗みをはたらく。<丹羽文雄「厭がらせの年齢」

乱暴を ～　強盗を ～　横領を ～　泥棒を ～

発する

(139) 毎年，平和宣言で政府や世界に軍備拡張への警告を発しております。<毎日　78. 8. 1　夕

(140) 他の講義のような話をにやにやと面白がっていた洋画家が質問を発した<野上彌生子「真知子」

命令を ～　指令を ～　勧告を ～　声明を ～　問いを ～

はらう

(141) 人々は彼の心眼を畏(おそ)れるように挙措に細心な注意を払っていた。<有吉佐和子「地唄」

(142) 林はそこで三十六分の長考をはらい，なおマギレを求めようとする。<毎日　79. 6. 18　朝

考慮を ～　配慮を ～　努力を ～　尊敬を ～　観察を ～

よせる

(143) この日，好投した武藤のピッチングにひそかに期待を寄せているようだった。<毎日　78. 8. 1　朝

(144) この調査に回答を寄せたのは，<毎日　78. 8. 9　朝

信頼を ～　同情を ～　支援を ～　愛情を ～　激励を ～

もつ

(145) 岡本は，耕一郎の兄月山(村井国夫)の行動に疑いをもつ。<毎日　78. 8. 23　夕

(146) が，この悲劇はもっと大きく，社会的なひろがりをもつはずであった。<毎日　78. 8. 2　朝

誇りを ～　かかわりを ～　うらみを ～　おそれを ～　のぞみを ～
にくしみを ～　意図を ～　目論見を ～　安心を ～　嫉妬を ～
心配を ～　発想を ～　理解を ～　交渉を ～　執着を ～

3.5.2　アスペクト的な意味

アスペクトはふつう動詞によってあらわされている動きの過程的な側面をあつかう文法的カテゴリーであるとされる。アスペクトと似た概念にアクチオンスアルトという用語もある。Lewandowski, Th. 1979 によると，「アクチオンスアルトというのは，動詞のあらわしている過程をなんらかの手つづきによって特徴づける意味論的なカテゴリーである。アクチオンスアルトはアスペクトに似ているけれども，paradigmatic につくられ，語彙＝意味論上におこるものである。アクチオンスアルトは，はなし手の(主体的な)把握にあるのではなくて，(対象的な)語彙的意味をとおして表現される多様性をあらわす。」とあり，スラヴ系の言語やギリシャ語にみられる文法的なカテゴリーであるアスペクトが，ゲルマン系やロマンス系の言語には語彙的なカテゴリーであるアクチオンスアルトが動きの過程を特徴づけるという(Conrad, R. 1978, Heupel, C. 1978 など)。ここでは，厳密な意味での文法的アスペクトをとりあげるわけではなく，語彙統語論的なアスペクト／アクチオンスアルトとでもよぶべき領域をあつかい，言及することになる。手つづきの区別をしない上位の概念を，アスペクト的表現とよんでおく。Erben, J. 1968

によれば，「Temporalität や Modalität と同じように Aktionalität という表現を使うことができる」とあり，Bondako, A. V. 1976 にも，ロシア語からの翻訳ではあるが，Aspektualität という用語がみられる。ヴォイス的表現のところで試みたように，現代日本語のアスペクト的表現のいくつかの手つづきを概観しておきたい。どのようなアスペクト相を特徴づけているかは問わないで，手つづきだけを問題とする。

①語彙的

のぼる——あがる　もえる——やける，のような対立で，絶対的な対立とはいいがたいが，前者が同じ現象の過程的な側面に重点がおかれているのに対して，後者の動詞は結果に重点がおかれている点でアスペクト的な対立がみられる。アスペクト的な意味は単語の語彙的意味のなかにある。

②語彙形態論的（複合語）

語構成という形態論的な手つづきによるが，一般性を欠くため語彙的でもある。

書きあがる　読みきる　登りつめる　やりとげる
おもいこむ　考えつく　作りはじめる　食べつづける
飲みおわる　……

これらのうち，〈……はじめる〉〈……つづける〉〈……おわる〉はかなり生産的であり，多くの動詞につく点で文法的な接辞にちかい。また，〈読み<u>きる</u>〉〈考え<u>つく</u>〉などは複合語のあと要素と接尾辞との中間的なものと思われる。

③統語論的

〈……て　いる〉〈……て　しまう〉〈……つつ　ある〉などの形式で，持続相，完了相，進行相などを特徴づけるアスペクト的表現をあらわすもの。動詞のなかには，これらの形式をとらないものもあるが（たとえば，ある，いる，できる，など），非常に多くの動詞に共通してみられる形式である。それゆえもっとも文法的な手つづ

きといえる。

④語彙統語論的

ここでとりあげるアスペクト的表現で，〈沈黙を　まもる〉〈接触を　たもつ〉〈準備を　すすめる〉などの，表現の動きとしての語彙的意味は動作名詞にあり，動詞は動作名詞でしめされる動きの過程的な意味をそえる複合的なアスペクト的表現。

以上にあげた，よっつのタイプの他にも，時間をあらわす名詞（一日中，いま）や，ある種の副詞（いつも，まだ，もう）なども当然アスペクト的表現に関与するであろう。

さて，④の語彙統語論的な手つづきによってアスペクト的表現を積極的に特徴づける動詞に，**はじめる，かかる，うつる，うつす，はいる，でる，とげる，やめる，はたす，達する，帰する，おわる，たもつ，つづける，まもる，めぐらす，かさねる，くりかえす，つむ，しずむ，すすめる，つよめる，かためる，こらす，こめる，ねる(練)，もらす**，などがある。このうち，**はじめる，つづける，おわる，くりかえす，やめる**，などの動詞は，その本来の意味が動きの過程的側面をあらわすので，実質的意味が希薄化したものという機能動詞の定義に抵触するけれども，ほかの例との関係でとりあげていく。**うつす，たもつ，まもる，かさねる，つむ**，などの動詞については，実質動詞との対立が以下のいくつかの連語の対比によってあきらかであろう。

実質動詞	機能動詞
○（すまいを）東京に　うつす	○（計画を）実行に　うつす
○議席を　たもつ	○連絡を　たもつ
○子供たちを　まもる	○沈黙を　まもる
○皿を　かさねる	○失敗を　かさねる
○本を　つむ	○練習を　つむ

アスペクト的表現を特徴づける機能動詞結合の形式的タイプを分類すると，

（ｉ） ガ格の名詞とくみあわさるもの

はじまる　かかる　うつる　おわる　やむ　かさなる

（ii） ヲ格の名詞とくみあわさるもの

はじめる　とげる　やめる　おわる　はたす　つづける　たもつ　まもる　めぐらす　かさねる　くりかえす　つむ　すすめる　つよめる　かためる　こらす　こめる　ねる

（iii） ニ格の名詞とくみあわさるもの

かかる　うつる　うつす　はいる　はじまる　でる　おわる　達する　帰す　しずむ

のようになる。

ここで，アスペクト的表現の諸相を論理主義的に分類しておく。ただし全貌を鳥瞰するためであって，わくをあらかじめきめて，そのわくに具体例をおさめこもうという意図ではない。多くの具体的な言語事実は論理主義的なわくをこわすであろうし，そこでわくぐみも修正される必要がおこるであろう。調査はまだその段階にいたっていない。ここでしめしたものは試験的な分類にすぎない。

- できごと
  - できごとのうつりかわりを問題にする（＋変化）
    - はじまり　①始動相(ingressiv)
    - おわり（結果に無関心）　②終結相(egressiv)
    - 成立
      - はじまりとおわりが中和していて，両方の相に関して無標(unmarked)　③実現相(resultativ)
  - できごとの状態を問題にする（－変化）
    - 中立的または無標(unmarked)　④継続相(durativ)
    - くりかえし　⑤反復相(frequentativ)
    - できごとの量的な側面を問題にする
      - つよめ　⑥強意相(intensiv)
      - よわめ　⑦緩和相(attenuativ)

一往以上のようにななつのアスペクト相を分類したが，他に瞬間相や習慣

相（主体の態度もかかわってくるのでムード的な意味もはいる）もありうるし，ふたつ以上の特徴がくみあわさった複合的な相もありうる。あとであげる反復＝強意相は複合的なアスペクト相の一例である。

⑥や⑦はふつうアスペクトのカテゴリーにふくまれないが，アクチオンスアルトのカテゴリーとしてとりあげられることもある(たとえば，Conrad, R. 1978)。⑦の例としてあげるものについては適当かどうか自信がない。また，⑤の反復相は，変化を問題にしているととらえたほうがよいかもしれない。

それぞれのアスペクト相の例を連語の形でしめしておこう。

①始動相	準備に	はいる	攻撃に	でる
②終結相	検討を	おわる	夕立が	やむ
③実現相	合意に	達する	失敗に	帰する
④継続相	沈黙を	まもる	思いを	めぐらす
⑤反復相	検討を	かさねる	失敗を	くりかえす
⑤′反復＝強意相	修業を	つむ	計画を	ねる
⑥強意相	工夫を	こらす	いかりを	こめる
⑦緩和相	微笑を	もらす	ぐちを	こぼす
	学問を	かじる		

以上にあげた連語のそれぞれの特徴は，〈準備に　はいる：準備する〉〈合意に　達する：合意する〉のような対比から導きだされたものである。〈準備に　はいる〉は〈準備する〉にくらべて，動作のはじまりが，また〈合意に　達する〉は〈合意する〉にくらべて，動作の実現がそれぞれ特徴づけられていると考えられる。なお，〈工夫を　こらす〉や〈いかりを　こめる〉は，ムード的な意味が加わる。

アスペクト的表現を特徴づける動詞を実例をそえてリストアップしていく。

3.5.2.1　始動相

うつす

(147) しかし私は昨日この頻死の狂人を見出した時，すぐ抱いた計画を，なかなか実行に移すことが出来なかった。<大岡昇平「野火」

(148) 新指導要領は，ほぼ原案どおりで五十七年度の一年生から実施に移される。<毎日　78. 8. 31　朝

うつる

(149) ベトナム当局は同日，進攻した中国軍に対し総攻撃に移るよう全国民に訴えた。<毎日　79. 2.18　朝

(150) 計画通りやるんだ。直ぐ，次の行動に移ってくれ，<小野／佐藤㋟「新幹線大爆破」

かかる

(151) やがて，彼女は，大地震の跡片づけにかかったが，<獅子文六「自由学校」

(152) 陽が傾くのを待って葉を摘みにかかった。<島木健作「生活の探求」

でる

(153) 中盤に中央から反撃に出たのは少し作戦負けだったのかもしれない。<毎日　79. 5.19　朝

(154) 攻撃に出られない悲しさには，<菊地寛「恩讐の彼方に」

はいる

(155) 遺族計三十七人で原告団を結成，本格的な訴訟準備に入った。<毎日　78. 8. 2　朝

(156) 木田はプロ入りを表明しているし早速交渉に入る。<毎日　78. 11. 23　朝

はじめる

(157) みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。<宮沢賢治「銀河鉄道の夜」

(158) 椅子とテーブルを片附けてその室でダンスをはじめた。<伊藤整「火の鳥」

はじめるは，もっぱらある動きの始動の相をあらわすから，始動相動詞とよんでもよいものである。動作の局面に直接関係する動詞であるから，**つづける**や**おわる**などの動詞とひとまとめにして局面動詞あるいはアスペクト動詞というような名づけもできよう。さて，**はじめる**はふつう動作名詞とむすびつくが，〈店を／料理屋を／酒を／雑誌を／結婚式を／会を／朝食を／英語を／昔話を／ぐちを／物語を／本質論を／……　はじめる〉のように動作

名詞以外の抽象名詞や具体名詞ともくみあわさり，動作がしめされなくて，連語のなかで動作がうかびでてくるものもある。たとえば，〈酒を　(のみ)はじめる〉〈英語を　(ならい)はじめる〉のように。他動詞**はじめる**に対応する自動詞**はじまる**は，動作性をもたないガ格の名詞とむすびつくことが多い。〈……ヲはじめる〉と〈……ガ　はじまる〉を対比すると後者のほうが非動作名詞とむすびつきやすいようである。同じことが，〈おわる：おえる／おわる〉〈つづける：つづく〉の他動詞と自動詞の対立をなす局面動詞についてもいえる。

3.5.2.2　終結相

おわる

(159) 一通りの挨拶，短い応答が終ると，<宮本百合子「伸子」

(160) 食事が終ると，永松は胸のポケットから煙草の葉を出し，<大岡昇平「野火」

(161) やがて校長は役場から来た金の調べを終った。<島崎藤村「破戒」

(162) とか，藤村が，緒締の手伝いを終って，一服した。<獅子文六「自由学校」

(163) それが失敗に終ったとき，彼の眼は過去に向った。<島木健吉「生活の探求」

(164) アルヴイグ夫人の努力は，遂に破滅に終らざるを得なかった。<阿部次郎「人格主義」

やむ

(165) 新たな拍手が起った。その拍手がやまないうちに，<徳永直「太陽のない街」

(166) 胸のうちに抱き込んで抑えるまで，彼の興奮はやまないのであった。<高見順「故旧忘れ得べき」

やめる

(167) 安吉はまばたきをやめて迫っている。<中野重治「むらぎも」

(168) 中国兵は射撃をやめたが，<週刊文春　79. 6. 14

3.5.2.3　実現相

帰する

(169) 議会の反応はなく，この試みも失敗に帰した。<毎日　78. 8. 16　夕

(170) 南アのダイヤモンド生産は一会社の独占に帰していて，<河上肇「貧乏物語」

達する

(171) 米議会を納得させられないような内容で合意に達するよりは，<毎日　78. 9. 7　夕

(172) 当初考えていた以上の協力体制が可能であるとの結論に達し，<毎日　79. 8. 15　朝

とげる

(173) 周囲も驚くほどの急成長をとげる場合もある。<毎日　79. 1.30　朝

(174) 満足して死ぬことの悦びに惹き込まれて，壮絶な猟銃自殺を遂げたのだと思う。<サンデー毎日　79. 2. 11.

はたす

(175) 四十二年一月総選挙でカムバックを果たした。<毎日　79. 3. 5　朝

(176) 一年前に武宮秀樹本因坊から奪った本因坊位の初防衛を果たしたのだから，<毎日　78. 8. 2　朝

3.5.2.4

たもつ

(177) 自分はやはり，ずっと兵隊といつまでも接触をたもっていたい……<野間宏「真空地帯」

(178) 良心と理想とを実現せんとする努力に向って不断の交渉を保って行くのが不思議なのである。<阿部次郎「人格主義」

つづく

(179) 暫く沈黙が続いた。<大岡昇平「野火」

(180) 劇しい争闘がしばらく続いた。<徳田秋声「あらくれ」

(181) 今年の夏は，太平洋高気圧の勢力が例年より優勢なため異常な暑さが続き，<毎日　78. 8. 9　朝

〈暑さが　つづく〉の例は，形容詞（暑い）を機能動詞結合によって，継続相を特徴づけた表現といえるかもしれない。形容詞には動詞のようにアスペクトを特徴づける形態論的な手つづきがないので，語彙的な手つづき（ずっと　暑い）や語彙統語論的な手つづきを必要とするのであろう。

つづける

(182) きぬ子は何もいわないで，すすり泣きを続けていた。<山本有三「波」
(183) 彼は舌打ちをずっとつづけていた。<高見順「故旧忘れ得べき」

まもる

(184) 仙台に於ける早月親佐は暫くの間は深く沈黙を守っていたが，<有島武郎「或る女」

めぐらす

(185) 私があれこれと思いをめぐらしていると，巨人軍の関係者から呼び出しがかかった。<週刊文春　79. 6.14.
(186) 少くとも，必要以上に，想像を回らして，<獅子文六「自由学校」

3.5.2.5　反復相

かさねる

(187) いままで教師として沢山の失敗をかさねて来た。<石川達三「人間の壁」
(188) その人たちが，みんなで議論を重ね，夜おそくまで研究にがんばっている。<高瀬善夫「生命の暗号を解く」

くりかえす

(189) 「原因があるはずだ」と詰め寄る和光堂研究員に要領を得ない返答を繰り返し，ごまかし通したという。<毎日　78. 9. 12　夕
(190) 夫は何度も何度も必死に哀願を繰り返している。<橋本忍㊥「人間革命」

(189) の例は，〈返答を　繰り返す〉という機能動詞結合と，〈ごまかし通す〉という複合動詞がならんで用いられている。前者は語彙統語論的な手つづきで反復相を，後者は語彙形態論的な手つづきで継続相を特徴づけている。

3.5.2.6　強意相・緩和相

ここでは，反復強意相，強意相，緩和相をとりあげる。あとのふたつは，動きの過程的な側面というより，動きの程度，すなわち量的側面をより問題にしている。反復強意相は，ちょうど雪だるまをつくるときのように，時間の経過とともに過去を吸収していくような動きを特徴づける。音楽で用いられるクレッシェンドの意味に似ている。

〈反復強意相〉

すすめる

(190) 五十五年度中に実現できるよう諸般の準備を進める。<毎日　79. 6. 13 朝

(191) アメリカでは，最近，子ウシを使って，材料の吟味を進めている。<渥美和彦「人工心臓を体内に」

つむ

(192) だが，それだけの努力を積んでみても，しょせん同時通訳とはいくらか浅薄なものである。<サンデー毎日　78. 8. 13.

(193) しかし彼はその研究をさらに上まわるケイコをつんで土俵にあらわれるのではあるまいか，<相撲　56. 11

〈強意相〉

かためる

(194) 政府は五日，最近のわが国経済はゆるやかながら確かな景気上昇の局面にはいった，との判断を固めた。<毎日　79. 2. 6　朝

(195) 組合員が結束をかためて共同の利益を擁護し，<石川達三「人間の壁」

こめる

(196) 私も馬の銅像に祈願をこめた。<林芙美子「放浪記」

(197) 感謝をこめて中原を睨めた。<石森史郎㊐「約束」

こらす

(198) 特に二次試験でペーパーテストを実施する大学は，出題に特別の工夫をこらすことを望みたい。<毎日　78. 8. 17　朝

(199) ただしなるべく化粧を凝らして，<河上肇「貧乏物語」

しずむ

(200) 白64とツケられて，武宮が長考に沈んだ。<毎日　79. 5. 19　朝

(201) 彼は快く眠りの中へ沈んで行った。<志賀直哉「暗夜行路」

つよめる

(202) 全農家に特集号を配って，意識改革を目指した指導を強める<朝日 79. 7. 6　朝

(203) ――などの理由で金氏は出国の意思はない，との判断を強めている。<毎日　79. 6. 13　夕

ふかめる

(204) さらに天草の島々を訪れて，このあたりの地学と歴史に対する理解を深めることができた。<文芸春秋　79. 9

(205) 〔……〕の三つの課題について討議を深めよう<毎日　79. 8. 1　朝

ねる

(206) この十日間，俺と黒木さんでじっくり計画をねった。<長谷川和彦㊐「宵待草」

(207) 自民党首脳部は，この（暴力）を排除して何とか重要議案を通してしまおうと，対策を練っていた。<石川達三「人間の壁」

〈緩和相〉

かじる

(208) 紺屋の長男のくせになまじ学問を齧ったりして，<長谷部／熊井㊐「忍ぶ川」

(209) 法哲学をただ齧っただけで，<文芸春秋　79. 6

こぼす

(210) つねが愚痴をこぼしている。<山田／朝間㊐「男はつらいよ寅次郎恋歌」

もらす

(211) 大佐は，微笑を漏らした。<大仏次郎「帰郷」

(212) 女が嘆息を一つ二つもらすのをききとめた。<井伏鱒二「本日休診」

3.5.3　ムード的な意味

ムードを動詞の形態論的なカテゴリーに限定するならば，ここであつかおうとする機能動詞結合は，ムードという用語をさけて，モダリティの表現手段のひとつとしてあげなければならない。ただモダリティといっても動作主体の態度にかかわるものであるから，かなりディクトゥムよりのモダリティである。ところでこのモダリティはヴォイスやアスペクトにくらべてはるかに複雑な様相を呈し，まだよくわかっていないことが多い。ここでは機能動詞結合との関係で，断片的に二三の例をしめすことしかできない。

アスペクト的な意味をもともとになっている局面動詞（はじめる，つづける，おわる，など）と同じように，語彙的にもともとモーダルな意味をもったモーダル動詞とでもよぶべきものがある。それらのなかで，**のぞむ**，**ねがう**，**命じる**などの動詞はもっぱら動作名詞とむすびついて〈援助を　のぞむ〉〈協力を　ねがう〉〈調査を　命じる〉のような連語を構成する。これもモーダル表現の一形態といえるであろう。モーダル動詞**おもう**には，この

ような連語を構成する能力がないので，モーダル動詞がモーダルな機能動詞結合を必ずつくるともいえない。

実質的意味と対立をなす，ムード的な意味を特徴づける機能動詞に，**はかる，ねらう，しめす，みせる，演じる／演ずる，講じる／講ずる** などがある。〈長さを　はかる〉〈えものを　ねらう〉などの連語では，動詞は実質的意味をもっている。

たとえば，**はかる**と**ねらう**は主体の意志を特徴づけていると思われる。次にしめす実例で，〈……しようとする〉と交替可能であろう。

(213) “日米繊維戦争”当時は佐藤首相の依頼によって米国に飛び，日米両国の調整をはかった。<毎日　78. 8. 2　朝

(214) 山口女子大が国立大と一致させ“二期校”から脱皮をはかっている。<毎日　79. 8. 1　朝

(215) この国際的公約を武器に議会の同法案審議促進を狙った。<毎日　78. 8. 16　夕

(213) の例でいうと，「調整をはかった」は「調整した」とくらべて，主体の意図性が強調されている。また，「調整した」は，調整が実現したことを意味するが，「調整を　はかった」は，調整が実現したかどうかわからない。ほかの例についてもまったく同様のことがいえる。

また，次の**しめす**と**みせる**を用いた表現は，主体の**示威**をあらわすモーダルな特徴をもっている。三人称にのみあらわれる形態であろう。

(216) 決勝戦では太田をリリーフして，東海大工を二安打に抑える好投を示した。<サンデー毎日　78. 8. 13

(217) 成田空港ジェット燃料用パイプライン受け入れへ千葉市が大きく動き出したことに対し，ルート沿線住民は強い反発をみせた。<毎日　78.8.19 夕

その他，〈力投を　演じる〉〈処置を　講ずる〉といった連語もなんらかのモーダルな意味を特徴づけていると思われる。ヲ格の名詞とのむすびつきをとりあげてきたが，〈想像が　つく〉〈納得が　いく〉などのガ格の名詞と機能動詞との連語も，〈想像する〉〈納得する〉との対比において，**自発**あるいは**可能**の意味が特徴づけられていないであろうか。〈……される〉〈……

できる〉にちかいと思われる。

さらに，モーダルな意味をもつ動作名詞に，**あるやみられる**などの動詞がむすびつくとモーダルな合成述語形式ができる。〈予定が　ある〉〈考えがみられる〉などの連語がそうである。

3.6　文体的特徴

単語には文体的特徴がある。ひとくちに文体的特徴といっても，さまざまなものさしによって分類可能であるが（たとえば，池上 1974 によれば，歴史的，地域的，社会的，機能的，とよっつの次元に関して分類できるという）ここでは，あらたまりやくだけといった，もっとも一般的な文体的特徴（機能的な分類）だけを問題にする。あらたまり＝文章語，ふつうのことば＝日常語，くだけ＝俗語のみっつが基本的な文体とよべるであろう（宮島1977）。

機能動詞結合の文体的特徴は，そのほとんどの場合に，連語を構成している単語の特徴に由来する。しかし，まれに，単語のもつ文体的特徴と異なった特徴を連語全体がつくりだすこともある。

次の左右の表現を比較してみよう。左の表現（機能動詞表現）のほうが，あらたまりの度合がつよいといえよう。

(218) 研究所には，各国のプリマトロジーの文献があつめられ，所員はそれぞれの研究を行なっている。<梅棹忠夫「高崎山」

(219) サルとはかぎらなかったけれど，なんでもいい，野生のけものたちの，自然のままの生活を研究する。<梅棹忠夫「高崎山」

(220) 金大中事件は，四十八年十一月二日，韓国の金鍾泌首相が来日して政治決着をみたが，<毎日　78. 8. 6　朝

(221) いや，もう其の問題は決着したです。<田山花袋「蒲団」

(222) 予のごとき非才もその中に織り込まれ，過分の御褒めに預り，<長岡半太郎「総長就業と廃業」

(223) そういう畑違いの人間に認められたこと，誉められたこと，<新藤兼人㊐「ある映画監督の生涯」

(224) 新聞開局をめぐって，テレ

(225) 子供のことで，両親が争う

ビ朝日と日本テレビが主導権争いを演じ，<サンデー毎日　78 8.13.

(226) 政府がテロリズムに対して厳重に警戒を施すように成れば，<大仏次郎「地霊」

ことが，<婦人倶楽部　56. 7.

(227) 課長は警戒するように俊介の顔をちらりと見たが，<開高健「パニック」

次にくだけが強調されている例をあげてみよう。左が俗語的表現である。

(228) 前日の悪天候で大阪空港に引き返したまま，足どめをくっていたブレイザー監督，<毎日 79. 2. 2　朝

(229) 警報で，足留めされていたのよ。いいから，もう寝て頂戴 <大仏次郎「帰郷」

(230) 二日夜，江川がラインバックに逆転ホームランをくらったとき，<毎日　79. 6. 4　夕

——→逆転ホームランされる

(231) テレビでおなじみのニューヨーク市警殺人課のマクロード刑事さんはヘマをやらかすたびに，<サンデー毎日　78.8.13.

——→失敗する

単語のもつ文体的特徴と機能動詞結合における文体的特徴のちがう例を二三あげておく。〈逃げを　うつ〉〈疑いを　いれる〉という連語はややかたい感じのするあらたまった文章語であるが，これらの連語を構成している単語はいずれも日常語であると思われる。また〈うらみを　かう〉〈学問を　かじる〉の連語では，構成要素である単語は中立的であるけれども，連語としては，やや俗語的である。

3.7　機能動詞と表記

機能動詞と表記との関係について一瞥しておきたい。

一般に，表意文字とされる漢字を，実質的意味を欠いた機能動詞にはあてにくい，という傾向がみられる。

たとえば，次の例をくらべてみよう。出典はいずれも石川達三「人間の壁」（新潮文庫）である。

(232) 網になった袋のなかに，さざえやとこぶしなどを三十ばかり　獲って来たのだった。

(233) すると三番目の委員長が立って行動の指揮をとる

(234) 支部長は県教組と密接な連絡をとりながら，

(235) 教育を守るためには，まず教師の生活を守らなくてはならない。

(236) しかしこの日，都教組は沈黙をまもって何のデモもおこなわず

上の実例で，実質動詞とみられる左の例では漢字があてられているのに，機能動詞として用いられている右の例では，かなで表記されている。同じ作品のなかで，同一の動詞の表記がつかいわけられているのは，あながち偶然とは思われない。表記上のちがいが，実質動詞と機能動詞の差を傍証していることになろう。しかし，こうした結論はさらに詳しい調査をまたねばならない。

筆者が武蔵大学人文学部の学生44人を被調査者にしておこなったテストの結果の一部をしめすと，次の表のようになる。このテストは，〈アノ　ヒトワ　エハガキオ　アツメテ　イマス〉のような文を口頭であたえて，かきとらせたものである。配列はランダム，何を調査しているかはしらせていない。このテストでは，同一の動詞が二回ずつ出てきて，実質的意味をもつものともたないものとを適当にくみあわせてある。表のそれぞれの対で，下にしめしたのが機能動詞結合である。この表から少なくとも次のことがよみとれる。

	動　詞	漢字	かな
(トラが)犬を	クウ	42	2
メッタ打ちを		8	36
荷物を	モツ	43	1
疑いを		28	16
木の実を	トル	20	24
連絡を		8	36
絵はがきを	アツメル	42	2
信頼を		32	12
教育を	マモル	43	1
沈黙を		32	12
オモチャを	アタエル	43	1
満足を		40	4

○機能動詞結合の動詞はかながき

されることが相対的におおい。

○かながきされる度合はまちまちである。表の〈クウ〉〈モツ〉〈トル〉はかなりはっきりした差がみとめられるが，そうでないものもある。

4. まとめにかえて

典型的には，名詞はモノ（対象）を，動詞は動作や過程や状態をあらわす。ちなみに，形容詞は性質や感情をあらわしている。これらは，個々の単語の具体的な語彙的意味にかぶせられた品詞の範疇的な意味といってよいであろう。しかしながら，これらの範疇的な意味は，しばしば品詞間に出入りがみられる。本稿でとりあげた問題は名詞と動詞との出入りとふかくかかわりあっている。名詞がモノではなくて，コト(動作・過程)をあらわす場合，また部分的にはサマ（状態）をあらわす場合の動詞とのむすびつきをあつかってきた。動詞の範疇的意味をもった名詞が，いわゆる動作名詞であり，その動作名詞が実質的意味のとぼしい動詞をしたがえて連語を構成するとき，その連語はむすびつきがつよく，文のなかで合成述語として機能することが多い。動作名詞が，意味論的にも統語論的にも中心的な役目をはたすため名詞表現とよぶことのできる表現構造がなりたつ。そのような表現構造では動作名詞が自由に連体修飾をうける。そえものとしての動詞はもっぱら文法的な機能をになうが，それらのあるものは，ヴォイスやアスペクトやムードといった文法的カテゴリーに積極的なかかわりをもつことがあった。また文体にも関与する。

ところで，本稿では通時論的な言及が保留されている。

言語は社会的かつ経験的なものとして閉じたものともいえるが，反面，あたらしいことばが次から次へとうみだされ，あるいはすでにある要素の新たなむすびつきがおこったりするものである。あたらしいことば，あたらしい概念がつくりだされていく過程で，すくなくとも現代日本語にかぎっていうならば，動詞よりも名詞のほうが基本になっていると思われる。そして，そ

の名詞を用いた表現のなかには，名詞を動作化あるいは作用化する用法が必要となってくる場合もあろう。日本語の動詞には，テンスやムードによる，さらに統語論上の，体系的な語形変化がみられる。これらの形態論的な制約がきびしくて，たとえば英語の telephone（電話⟶電話を　かける），telegraph(電報⟶電報を　うつ)，book(本⟶記帳する)，water（水⟶水を　やる）どのように，名詞をそのまま動詞として用いるというようなことはできない。接尾辞や動詞成分を付加することによって派生語や複合語の形態をとり，あたらしい動詞をつくるか，あるいは，補助的な動詞を補って連語の形態をとるかのいずれかの方法で，名詞の動作化・作用化がおこる。前者は形態論的，後者は統語論的な手つづきによるものといえる。動作や作用という範疇的な意味を統語論的な手つづき，すなわち連語に展開したものが機能動詞結合であった。

ここで機能動詞結合とみたもののなかには，外国語からの借用（文法的借用）とみられるものもある。〈注意を　はらう〉(to pay one's attention)，〈沈黙を　まもる〉(to keep silence) は英語からの借用であるという（楳垣 1943，1963)。また，〈結論を　くだす〉〈好評を　博する〉〈警告を　発する〉にあたる現代中国語は〈下结论〉〈博好评〉〈发警告〉である。ただ，この場合どちらが借用したものか，あるいは独自に別々にうまれた表現であるのか，いまのところ調べがおよんでいない。偶然同じような連語ができることも当然ありうる。ちなみに，〈決定を　くだす〉にあたるドイツ語は，die Entscheidung fällen（Entscheidung＝決定，fällen＝くだす）である。借用であるか，独自にうまれた表現であるかの決定をくだすことは容易ではない。今後の課題である。

《注》

(注1)　日本語の分析で，機能動詞という用語をはじめて使ったのはおそらく岩崎 1974であろう。岩崎はドイツ語の名詞文体をささえる機能動詞(Funktionsverben)を説明して，日本語の「……〔を〕する」の機能動詞性に言及している。とりあげている動詞は「……〔を〕する」のタイプの〈する〉だけである。

また，ふるく山田1922に形式用言，松下1922，1930に形式動詞という用語がみら

れる。山田によると，用言は実質用言と形式用言の二つに大別され，形式用言は，「陳述の力を有することは勿論だが実質の甚しく欠乏してただ存在をいふに止まり進んでは単に陳述の力を有するだけに止まるものである」と定義づけられ，国語では，〈ある〉〈だ〉〈です〉などがそれであるという。一方，松下の形式動詞は「実質的意義が無く唯形式的意義だけを持つてゐる動詞」（松下1926）であり，以下のように分類される（松下1930)。なお，松下の動詞は，いわゆる形容詞をふくむひろい概念である。

形式動詞	単純形式動詞	(勉強する)	(御帰り)なさる
	修用語を承ける形式動詞	(笑つて)居る	(行つて)しまふ
	連體語を承ける形式動詞	(有る)やうです	(來る)のです
	主語客語を承ける形式動詞	(善い音)がする	(官吏に)なる
	接頭形式動詞	打つて(變る)	得て（そうなり易い）
	寄生形式動詞	すると	だけれども

小稿であつかっている機能動詞は定義からも明らかなように，存在詞に限定した山田の形式用言とも異なるし，「(笑って）いる」「(行って）しまう」などの補助動詞や「すると」「だけれども」などの接続副詞をふくむ松下の形式動詞ともちがう。松下のいう「主語客語を承ける形式動詞」と機能動詞とはちかいと思われる。

（注２） 連語とは，名づけ的な性格をもち，アクチュアルな伝達を前提としない，単語をひろげた統語論上の単位をさす。連語にはモーダルな特徴やテンスの特徴はない。連語は，モダリティやテンスの特徴をもった，伝達を前提とした文と対立する概念である（鈴木1972，Велошапкова，В. А. 1977参照)。

ところで，ガ格の名詞と動詞のくみあわせは，連語論の対象からはずされることがある。陳述的な要素がはいりこんでくるという理由からである。しかし，ここでは，ガ格の名詞もヲ格やニ格などと同様にあつかって考察の対象とした。

なお，あとで，いわゆる慣用句に相当するものを固定連語とよぶ。固定連語は形統語論的に連語であるけれども，意味論的には，ひとつの単語に相当する，あるいはそれにきわめてちかいものであって，連語とはよびにくいものであるが，そういう矛盾をそなえたものとして，固定連語という用語を用いる。この用語はすでに，中村1977にみられる。

（注３） 〈さそいを　うける〉のウケルはガ格にたつ名詞の深層の格として Agent の場合と Experiencer の場合が考えられ，後者のときにのみ〈さそわれる〉と交替しうる。Agent と Experiencer のちがいは，意図的か無意図的かの差に由来する。

（注４） このことを傍証するものとして，「あの人のいうのはみんなウソだ」という文はうけいれられるが，「あの人のつくのはみんなウソだ」という文はうけいれにくいという事実があげられる。〈いう〉は〈つく〉に比べて，〈ウソ〉から独立して

いる。

(注5) ここにあげた連語を慣用句とみる人も多いであろうが，〈汗〉や〈いびき〉は〈かく〉以外の動詞ともむすびつきうるし，連語の要素としての意味をもつので，慣用句とは区別される。〈べそを　かく〉は，〈べそ〉の意味もはっきりせず，慣用句とみるべきであろう。

(注6) このような，本来〈もつ〉〈うける〉〈経験する〉などの意味をもった動詞が，受身表現をつくる現象は，英語のほかにもみられる。

〈ドイツ語〉 Er hat Unterstützung bekommen.（あの人はたすけられた。）
lch habe Schelte gekriegt.（おめだまをくった。＝しかられた。）

〈ロシア語〉 Он терпит обиды.（彼は侮辱されている。）
Они испытывают давление со стороны.（あの人たちはまわりから抑圧をうけている。＝抑圧されている。）

牧野1978によるとビルマ語（kham, khamra）や中国語（被，蒙）にも同様の例があるという。

《文　献》

Белошапкова, В. А. 1977 Современный русский язык　синтаксис

Bondarko, A.V. 1976 Das Genus verbi und sein funktional-semantisches Feld : Studia Grammatica XIII

Conrad, R. (ed.) 1978² Kleines Wörterbuch sprachwissenschaftlicher Termini.

Erben, J. 1968 Deutsche Grammatik

Heringer, H.J. 1968 Die Opposition von ‚kommen' und ‚bringen' als Funktionsverben

Heupel, C. 1978³ Linguistisches Wörterbuch.

池上嘉彦 1975 『意味論』

岩崎英二郎 1974 「ドイツ語と日本語の機能動詞」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』6.

Lewandowski, Th. 1979³ Linguistisches Wörterbuch 1

牧野成一 1978 『ことばと空間』

松下大三郎 1926 『改撰標準日本文法』

————1930 『標準日本口語法』

宮島達夫 1977 「単語の文体的特徴」『松村明教授還暦記念　国語学と国語史』

村木新次郎／堀江久美子 1974 「動詞の結合価・その1」『ＬＤＰ』13.

中村　明 1977 「語の意味と固定連語の扱い」『日本語教育』33.

仁田義雄 1974 「日本語結合価文法序説」『国語学』98.

v. Polenz, P. 1953 Funktionsverben im heutigen Deutsch : Wirkendes Wort 5.
——————1964 〉erfolgen〈 als Funktionsverb substantivischer Geschenhenbezeichnung : Zeitschrift für deutsche Sprache 20.
Schmidt, W. 1965 Lexikalische und aktuelle Bedeutung.
鈴木重幸 1964～66 「文法について」『教育国語』2.3.4,『文法と文法指導』1972所収
高木一彦 1974 「慣用句研究のために」『教育国語』38,『日本語研究の方法』1978所収
楳垣 実 1943[1]. 1963[2] 『日本外来語の研究』
山田孝雄 1922 『日本文法講義』

(1979. 9. 15)

脱稿後，Liefrink, F. 1973. 'Semantico-Syntax' をみた。Leifrink は生成文法の立場から，英語の名詞句と動詞句のむすびつきを検討して， analytic, synthetic, periphrastic な構造に言及し，それぞれの側面の詳細な分析に及んでいる。本稿でとりあげた問題と多くの点で類似している。なお，英語の機能動詞結合（ただし，この用語は用いられていない）の分析は，プラグ学派の Renský, M. 1964. 'English Verbo-Nominal Phrases' : Vachek, J. (ed.) Travaux Linguistiques de Prague 1. にもみられる。

Zusammenfassung

Funktionsverben im heutigen Japanischen.

MURAKI Shinjiro

Bisher sind die Funktionsverben im Japanischen noch nicht untersucht worden. Zuerst versuchte ich sie zu definieren und Funktionsverbgefüge nach morpho-syntaktischen Gesichtspunkten in fünf Typen zu unterteilen. Funktionsverben sind solche Verben, die vorwiegend oder ausschliesslich eine grammatische (morphologische und syntaktische) Funktion ausüben, während andere Glieder, meistens Nomen, die lexikalische Bedeutung enthalten. In Anschluss an die allgemeine Definition werden die einzelnen Eelmente, nämlich Nomen actionis und Verben, die Funktionsverben sein können, genauer ausgeführt.

Die Funktionsverbgefüge können oftmals ohne wesentliche Bedeutungsveränderung durch entsprechende Vollverben ersetzt werden, z. B. nioi-ga suru——niou, sasoi-o kakeru——sasou, utagai-o motu/ireru/hasamu——utagau. Sie stehen manchmal in der Bedeutung des Passivs wie sasoi-o ukeru——sasowareru, hihan-o abiru——hihan-sareru, oder der Bedeutung des Kausativum wie uruoi-o ataeru——uruowaseru, daun-o ubau——daun-saseru. Auch verschiedene Aktionsarten können durch syntaktische Mittel charakterisiert werden, nämlich die Verbindung des Funktionsverbs, z, B. koogeki-ni deru (ingressiv), sippai-ni owaru (egressiv), yuusyoo-o hatasu (resultativ), omoi-o megurasu (durativ), kentoo-o kasaneru (frequentativ), kuhuu-o korasu (intensiv), bisyoo-o morasu(attenuativ), keiken-o tumu(frequentativ-intensiv).